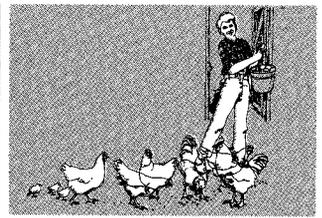
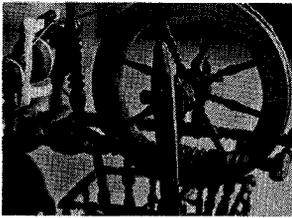
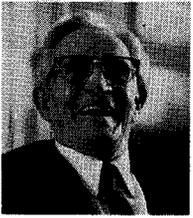


# 聖徒の道

11 1979



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スパンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・シンクレア  
トーマス・S・モンソン  
ポイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア  
レックス・D・ピネガー  
ヒュー・W・ピノック

教会誌編集主幹

M・ラッセル・バラード・ジュニア

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)  
キャロル・ラーセン (編集副主幹)  
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

赤松成次郎 (翻訳部長)

も く じ

永遠の真理に関する原則……………マリオン・G・ロムニー…………… 1  
 召しを喜びとするか、  
 苦痛とするか……………ラリー・ヒラー…………… 3  
 夫婦の時間……………リンゼイ・R・カーチス…………… 8  
 私は幸せです……………パトリシア・A・エイジャー……………11  
 最も大いなる責任……………デビッド・O・マッケイ……………12  
 西部の地で……………グレン・M・レオナード……………15  
 ルイザとカモメ……………シャルラ・ツィーマン……………21  
 ジャネットのねがい……………マージョリー・B・ニュートン……………24  
 タマゴ売り……………フランクリン・D・リチャーズ……………26  
 標準を尊ぶ……………エズラ・タフト・ベンソン……………29  
 占星術の思い出……………ジェームズ・E・タルメージ……………30  
 毛糸を紡ぐ家族…………………………32  
 心を動かす話……………エリック・スチーブン  
 ゲイル・S・グローバー……………36  
 1988年の指導者であるあなた……………M・ラッセル・バラード・ジュニア……………39  
 ローカル・ニュース…………………………44

表紙の説明

「リバプールより出港する聖徒たち」ケン・バクスター画。

聖徒の道 11月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
 東京都港区南麻布5—10—30  
 印刷所 株式会社 精興社  
 配 送 東京ディストリビューション・センター  
 東京都世田谷区上用賀4—9—19  
 定 価 年間予約1,700円 1部150円  
 海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PRMA 0631JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0—41512  
 口座名 <sup>まっじつ</sup>末日聖徒イエス・キリスト教会  
 東京ディストリビューション・センター

**主** は私たちを導くために、啓示によって永遠の真理に関する原則を明らかにされた。それらの啓示は、教義と聖約、モルモン経、聖書、そして高価なる真珠に記されている。

教義と聖約のはしがきの中で、主は次のように語っておられる。

「主なるわれ、この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば、わが僕ジョセフ・スミ

## 永遠の真理に 関する原則

第二副管長  
マリオン・G・ロムニー



ス(二代目)を呼び天より語りて彼に誠命<sup>いままじめ</sup>を下せり。

また他の者どもにもこれを世の人々に宣ぶ様誠命を与えられたと、すべてこは予言者たちの記せし事の成就せんがためなり。」(教義と聖約1:17-18)

上述の戒めにも、またその他の聖句にも言われている永遠の真理に関する原則に忠実であるならば、人は現世を安全に歩み、永遠の生命へと導かれるであろう。

「主なるわれは、これらの事を進んですべての人に知らせんと思うなり。

そは、われは人々を偏り見る者にあらざれば……なり。」(教義と聖約1:34-35)

主は、永遠の真理に関する原則を明らかにされた理由として、次の事柄を具体的に挙げられておられる。人がその同胞の勧告にも肉の権力にも依り頼まず、神を信頼するようになる。信仰が世において高まる。人の過ちが明らかにされる。知恵を求めれば教えを授けられる。罪を犯したならば、悔い改めるために懲らしめられる。へりくだるならば強くされて天の祝福を受け、またその時々知識を授けられる。これらの理由で主は原則を明らかにされたのである。(教義と聖約第1章参照)

世の中のほとんどの人は、啓示されたこれらの原則を人生の指針として受け入れていない。しかし、私たち末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は、それを受け入れている。それ故、私たちは何事もこの永遠の原則に関する理解と証に照らして行なわなければならないように、私には思われる。これまでの経験から、私たちは絶えずそのような行動を取るように努める必要があると、私は感じている。

私たちの周囲の世界は、私たちの行ないの標準を絶えず下落させ、私たちから福音の精神を奪い、そして啓示された真理の原則を無

視するように助長する策略や態度で満ちあふれている。そのような悪に屈することなく、抵抗する唯一の方法は、それらに関する主のみ言葉を絶えず見返し、思いめぐらすことである。

第一次世界大戦中に、ジョセフ・F・スミス大管長はこの真理を次のように強調している。

「私たちは危険な時代に生きてるとよく言われる。確かに私たちは今危険な時代にいる。しかし、私はその恐怖の苦しみは感じない。私には恐怖がない。私は恐怖に見舞われないような生活をするつもりである。私は可能ならば、世の危険から免れることができるよう、神の戒めと、私に対する導きとして啓示された律法に従って生活するつもりである。私が自分の義務を果たし、神と交流を持ち、兄弟たちと交際できる状態であって、世の人人の前に汚れなく、しみもなく、神の律法に対する罪もなく立つことができるならば、何が起ころうと、一切構わない。もし私がおんなのような思いと行ないを保ち続けることができるならば、私にはいつでも用意ができてことになる。したがって、何も心配はない。私は困難や、恐怖をまったく感じないであろう。」(*Improvement Era* 「インブループメント・エラ」1917年7月号, p. 827)

苦難に直面しながらも、永遠の真理の原則に従って義しい生活をしてきたスミス大管長は、上記の言葉にあるような平安を感じていたのである。

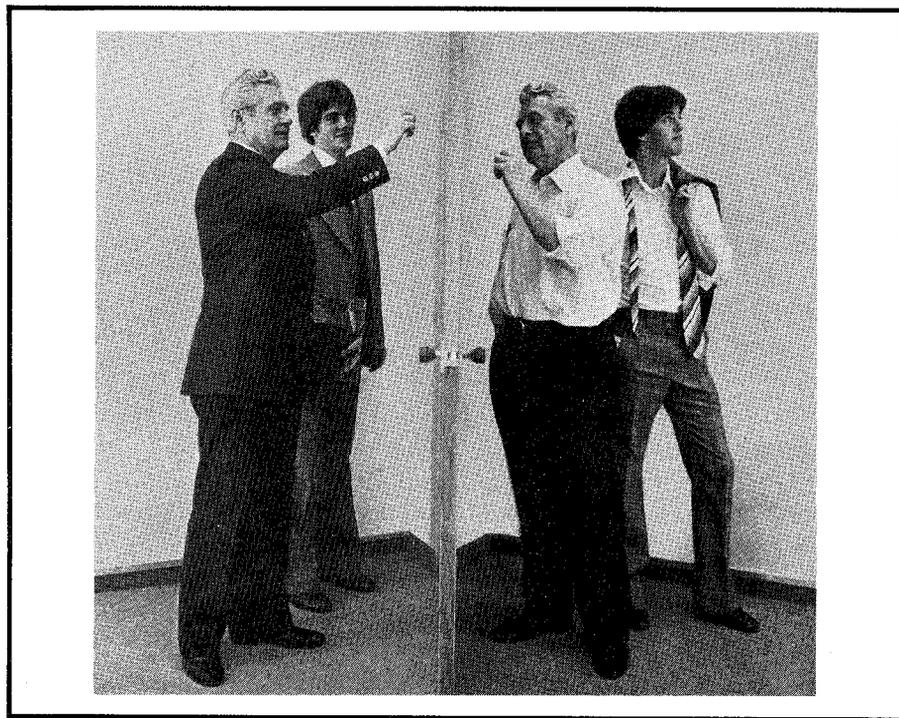
私の願いは、研究と信仰と祈りによって私たちが啓示された永遠の真理の原則を常に心に留め、証を強めて、その結果、絶えず真理の原則に照らして行動できるようになることである。そのようにするならば、たとえ周囲の世界に争いがあつたとしても、私たちは平和に暮らすことができるであろう。

# 召しを喜びとするか、 苦痛とするか

ラリー・ヒラー

**主**は、私たちが主の王国で奉仕することを望んでおられる。しかも、自発的に喜んで奉仕することを望んでおられる。監督として、私はいろいろな人に会ってきたが、ある教会員は、単なる義務感だけでしぶしぶ召しを受け、そのままの気持ちで責任を果たして、

結局何の満足感も得られないということがあ  
る。ところが、同じようにためらいの気持ち  
で召しを受けた人々が、立派にその責任を果  
たし、喜びを得ていることもある。どちらの  
場合も、監督会は祈りの気持ちをもって慎重  
に検討し、みたまの確認を得て決めたことで



ある。

それなのに、この違いは一体どういうことであろうか。教会でどのような召しを受けても喜んでその責任を果たす人がいるのはなぜだろうか。彼らは、普通の人よりも才能に恵まれ、有能だからだろうか。それとも、教会の召しで喜びと満足感を得るには、特別な原則や方法があるというのだろうか。

そのひとつの手がかりを、先日私は一緒に働いているブレンダという女性との会話から得ることができた。ブレンダは私たちが会話を交わす1、2カ月前に、ワード部の若い女性書記に召されていた。召しを受けた当時、彼女は新しい召しに対してどうもやる気が起きてこないと言っていた。そこで私は、先日会った時に、召しはどうですかと尋ねてみた。すると驚いたことに、彼女は今はその召しを非常に愛するようになっていたのである。一体、彼女の身にどのようなことが起こったのだろうか。

ブレンダはこう答えた。「私は監督からの召しは断わってはならないと固く信じています。それで、監督があの日家に来て、若い女性書記として働くように私を召された時も、お断わりすることができませんでした。だからといって、喜んでお受けしますとも言えませんでした。これまでも何度か若い女性の責任を果たしてきましたが、どうしても好きになれなかったからです。ところが、私が何も言わないものですから、監督は私が承諾したものだと思って、次の日曜日の聖餐会で支持をとってしまったのです。新しい召しを果たし始めた時、私は殉教者になったような心境でした。」

当然のことながら、私は何がそのような心境に変化をもたらしたのかブレンダに尋ねた。そして、彼女の経験と、私自身が経験したことや人々から学んだことを織り混ぜてみて、私は次のような結論に到達した。「もし私たちがあがる原則と方法を生活に生かすことができるならば、必ずや召しを喜んで果たせるよう

になる」と。

1. 自分の召しに対して、自分自身に対して、また自分と共に働くように召された人々に対して心を広く持つ

ブレンダは過去に若い女性の責任を果たしていて、あまり楽しく感じなかった。しかし、今度こそ新しい召しからできるだけ多くの良いものを得ようと決心したのである。「私は自分の心を変えることができるように、断食し、祈りました。そして、特別に祝福を授けてほしいと夫に頼みました。」ブレンダは、召しを不承不承引き受けるのを止め、召しに対する自分の気持ちを変えるようにしたのである。

私は、自分自身に関する評価を変えることの模範のある監督から学んだ。彼は、自分に与えられた祝福師の祝福の中で、自分が「人人の指導者となり、教会で指導者として数々の職に召されるであろう」という言葉にどうしても納得できなかった。自分はどう考えても指導者のタイプではないと思っていたからである。しかし、やがて彼は長老定員会の副会長に召され、次いで会長にも召された。その後、知識と経験を積み、さらに2度ほど長老定員会会長の召しを果たし、それから高等評議員に召され、今は監督としてその務めを果たしている。「主が私以上に私のことをよく御存じであることを知るのに、なぜこれ程時間がかかったのか不思議なほどです。私は今でも指導者の職に就きたいとは思いません。けれども、もしそのような職に召されたら、最善を尽くせば、必ず主が必要な助けを与えて下さることを知っています。」

人々に対して心を広く持つことは、私たちが育まなければならない最も大切な資質のひとつである。人は教会のすべてであり、どのような召しであっても、私たちは人々と共に働き、人々のために奉仕することを忘れてはならないのである。したがって、私たちが共に働き、奉仕する人々に対してどのように感じているかが、召しを立派に果たし、そこか

ら喜びを得るための必須条件である。

私は、つい最近まで、自分の財布の中に子供たちがまだ赤ちゃんであった頃の写真を入っていた。しかし今では、子供たちも大きく成長し、すっかり変わっている。これと同じように、私たちが抱えている他人に対する心象も一昔前のものであることがしばしばある。人の霊性もまた成長し、変わるからである。私たちが他人に対して抱えている考え方も、一度一緒に働いてみると、それが誤っていたのに気づくことが往々にしてある。

私が通っていた高等学校に、あまり評判のよくない女の子がいた。その不快なうわさがどれだけ真実か私も知らない。しかし、彼女がいろいろな規則を破って人々を困らせている悪い仲間と交わっていることは事実であった。そして、教会員でありながら、しばしばタバコを吸い、酒を飲んでいたようである。しかし、卒業してからは、数年間彼女のことなど考えたこともなかった。恐らく、だれかに彼女のことを聞かれても、高校時代のかすかな思い出をたよりに説明するしかなかったのであろう。

しかし、高等学校を卒業して5年以上はたっていたと思う。私はある晩、神殿にいた時、夫婦の結び固めを受ける花嫁として彼女の名前が読み上げられるのを耳にしたのである。私は、彼女の生活に起こった大きな変化を目の当たりにして、とてもうれしかった。けれども驚くことはない。福音は絶えず人を変えらるからである。

## 2. 自分が奉仕するように召された人々を愛することを学ぶ

これは人々に対して心を広く持つことと深い関係がある。私たちが人を愛するのは、それが第二の大切な戒めであると同時に、愛は義務を楽しいものに変え、さらに私たちは互いに愛し合っていることを実感するまで、真に心に触れ合うことができないからである。

自分が愛せそうもない人を愛するようにな

るひとつの簡単な方法は、想像力を働かせることである。まず心の中に、将来のある日の証会の光景を思い浮かべる。そこに立っている人が目にいっぱい涙をためて、救い主の愛や、悔い改めと赦しの原則について力強い証を述べている姿を想像してみるのである。このことは、実際に起こり得ることである。いつでも、教会全体で目にする光景である。そこで、人々を見る時は、あなたの助けと、天父の助けがあれば、その人が将来どのような人になれるかという観点から人々を見守っていただきたいのである。

## 3. 義務を学び、そしてそれを果たす

主は、教義と聖約の中で次のように述べておられる。「この故に、今や神権者皆各々その義務を<sup>覚え</sup>。また<sup>主の</sup>召が任命せられたる務めを全く勤勉に勤むべし。」(教義と聖約107:99)時折、私たちは主に次のように祈っていることがある。「どうかこの責任が楽しくなるように助けて下さい。そうすれば、責任を果たします。」しかし、私たちは何よりも仕事をよく果たせるように助けを願うべきである。そうすれば、それは楽しくなるからである。

ある時、宣教師の証会に出席した教会幹部のひとりから次のような話を聞いたことがある。ある長老が立ち上がって証を述べた。「私は今、自分が行なっていることがとても楽しいのです。」それから考えをまとめるように間を置いてこう言った。「それを楽しむことができらるからだと思います。」私たちは自分で行なわなくて、真の喜びを享受することはできないのである。

## 4. 大きなビジョンを持つ

自分の召しが神の王国を建設し、人々の人格を築く上で大いに役立っているという確信を得るように努力する。そうすれば、使命感と目的意識を持てるであろう。

ブレンダは、大きなビジョンを持つことが、自分の召しを楽しく果たせることと密接な関

係にあると述べている。「ただ数字を埋め、報告書を書き、出席簿に出欠を記録するだけでは、私にとって大して価値がないと思いました。その時、私は、そのような働きでクラス・アドバイザーと若い女性会長に各個人の活動状況を知らせる助けを与えているということに気付いたのです。また、そうすることは監督が若い女性一人一人と大切な年次面接を行なえるように、情報を提供することにもなりました。このように、召しをただ統計による事務的な処理に終わらせることなく、それを忠実に果たすようにすれば、必ず人々を助けることができるということがわかってきたのです。」

ホームティーチングの召しは、大きなビジョンを持たなければ単なるはんば仕事に終わってしまうという召しの好例である。私の知っている立派なホームティーチャーは皆、家族の長を通じて家族を強めることの大切さをよくわきまえており、また自分が家族と神権指導者の間の重要な仲立ちであることを自覚している。彼らは担当家族について、数字では表わせないことを知っているのである。

## 5. 自己のすべてを捧げる

主は僕を通じて召しを与えて下さる時、私たちの才能や能力、必要のすべてを計算に入れておられる。その召しは、その人のすべてに対して与えられたものであり、その中には私たちが全力を尽くして物事をなす時にしか表われない隠れた才能も含まれている。

主は心を尽くし、勢力を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして神の務めをなすようにと言われた。(教義と聖約4:2参照)しかし、それはただの伝道の業のみを指して言われたのではない。私たちは自分自身を捧げる度合に応じて、それだけ成功と成長を得ることができるのである。

## 6. 成功を取めるように努力する

長期にわたる困難な仕事に携わる場合、そ

の間成功を取めることは、ほこりまみれの長旅の途中で冷たい水を口にするのに似ている。

あるひとりのホームティーチャーが苦勞の末によく成功を取めた経験を次のように語っていた。「私の担当家族はどちらかと言えば活発でしたが、全面的に福音の原則に従って生活しようという決意はまだ欠けていたようでした。そこで私は、何について話し合うようにすれば、彼らにとって最も価値があるかを教えて下さるように、主に祈りました。そして、断食の原則について話すように靈感を受けたのです。するとどうでしょう。彼らはこの断食の原則についてすでに話し合っていたのです。私は彼らの質問に答え、この原則を活用するように励ましました。次の断食日には、これまで一度も断食をしたことのない子供のひとりが断食をすることを決意しました。そして、それは本当に素晴らしい経験だったと目を輝やかせながら話してくれました。

このようなたったひとつの成功から、私は大きな勇気と励みを得て、ホームティーチャーとしてもっとよい働きをしようという気持ちが湧いてきました。そして、成功を取めるたびに、自分は本当に価値ある業に携わっているという気持ちを新たにすることができたのです。今日でも、その当時得た証によって励まされることがあります。私はこの召しを心から喜んでいます。」

## 7. 召しを自分の生活に適用させる

現在受けている召しに十分な時間を割かなければ、立派に責任を果たすことはできないし、逆に時間を多くかけ過ぎると、それと同等か、あるいはそれ以上に大切なことを失うこともなりかねない。そこで、私たちは皆、時には立ち止まって、自分は時間を賢明に使っているかどうか自問自答してみることが大切である。私たちは今最も必要なことを行なっているだろうか、と。

産業界の研究によると、約20%の仕事で成

果の約80%をあげることができるが、成果の残りの20%をあげるのには約80%の仕事が必要であると言われている。すなわち、私たちが家族や自分の召し、あるいは自分自身について、20%の努力で80%の成果をあげることができることをはっきりと理解しておけば、私たちは最少の時間で最大の効果をあげることができるであろう。

例えば、私は子供たちと一緒に時間を過ごすことを必要としている。もし私が子供たちを映画に連れて行き、約2時間一緒に過ごしたとする。しかし、私たちは話をすることもなく、ただ映画を見ているだけである。しかしそれとは別に、一時間でよいから近所を散歩するか、庭の手入れを一緒にしたとする。そうすれば、私たちは会話を交わし、楽しい一時を過ごすことができるのである。誤解してもらいたくないが、私は映画と一緒に行くのが悪いと言っているのではない。ただたとえ仕事が非常に忙しくても、上手に選択すれば、もっと少ない時間で多くのことができるはずであると言っているのである。事実、私は、子供たちと一緒に草取りをするなどして、ひとつの活動で2つ以上の必要を満たすようにしている。

私たちが注意を怠れば、私たちの時間は毎日、ほかの人々のことや、様々な出来事のために失われてしまうことだろう。私たちは何を優先すべきかを知って、その優先事項をいつ、どのように果たすかを賢明に判断しなければならない。それから自分の時間と比べて、できないようであれば断わった方がよい。そのようにしてはじめて、私たちは本当に重要なこと、すなわち、自分と救い主との関係、家族の霊的な福利、主の王国での奉仕、また自分の仕事などに自分の時間を割くことができるのである。

## 8. 聖霊を伴侶として生活する

私たちが自分の召しに喜びを見いだしたければ、聖霊を伴侶として生活することが、最

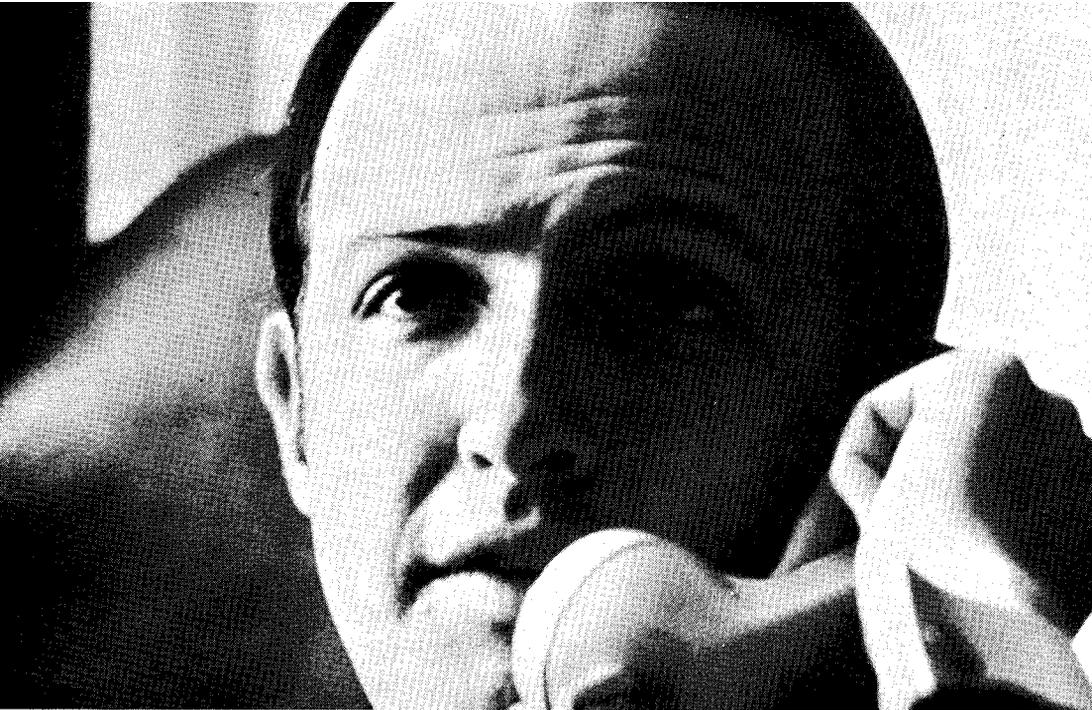
も容易で、最も大切な原則である。みたまは、私たちが必要な時に、必要なことを思い出させて下さる。聖きみたまの助けがあってこそ、私たちは、主が私たちに使わせたいと思っておられる隠れた才能を見いだし、伸ばすことができるのである。さらに通常の責任とは別に、神の王国を建設する上で自分は何のような役割を果たせばよいか、大きなビジョンを持たせて下さるのである。また、聖きみたまは私たちが落胆している時に慰め、迷っている時に靈感を与え、疲れている時に励まし、そして私たちが主に喜ばれる行ないをしている時に、心を喜びで満たして下さいるのである。

しかし、そうだからといって、私たちが教会でなす働きがすべて満足と幸福をもたらすということではない。物事には相反するものがあるという原則は、他の社会と同じように教会にも存在するからである。私たちは、そのような落胆、不完全さ、疲れを克服し、打ち勝つことによって成長するのである。しかし、ほとんどの人はどのような召しであれ、正しい原則に従って心から努力しさえすれば、現在得ている以上の大きな喜びと満足を見いだせるのである。「人類が現世に在るのは幸福を得んためである。」(II ニーフай 2 : 25) とすれば、私たちは主の奉仕のみ業にあっては幸福を得られるはずである。

教会の召しを果たすことによって得られる喜びは、責任を十分に果たしたことからくる満足感、また人々の生活によい影響をもたらした時に感じた温かい愛の気持ち、とりわけみたまが「よくできた」とささやきかけて下さる時に感じる快い安らぎの気持ちである。

ラリー・ヒラー

国際機関誌(「聖徒の道」が含まれる)の編集主幹。ソルトレーク・シティのワード部の監督を務めている。



## 夫婦の時間

リンゼイ・R・カーチス

**手** 広く商売をしている私の友人が、成功の秘訣を私に教えてくれた。それは販売の手腕ではない。彼がそのことに気付いたのは、ある日、取引先のお客さんと話をしている時にかかってきた電話によってであった。

秘書が言った。「奥様からお電話のようですが」

「あなた、ごめんなさい。お元気？」

「元気だよ。忙しいけどね。どうしたんだい。電話なんかしてきて？」

少し間を置いて、ベティーの沈んだ声が聞こえてきた。「ううん、ただあなたの声を聞けば気分が晴れると思って。ごめんなさい。忙しい時に。」

ラルフはベティーを愛していた。その時も

世界中のだれよりも愛していると言った。そして突然あることに気付いたのだった。ベティーは家で、いたずら盛りの、おしゃべりでいつもけんかばかりしている手のかかる子供たち、まだ学校に行っていない4人の子供たちの面倒を見ている。彼女だって忙しい。きっといらいらすることもあはずだ。

ラルフは気を取り直してすぐに謝った。そして、改めて愛していることを伝え、気が向いた時はいつでも電話をかけるようにと言って、ベティーをその晩食事に誘った。

その時ラルフが発見したのはこういうことであった。「ベティーは自分にとって世界中で一番大切な人だ。だからまず第一に彼女に時間を割くのが当たり前だ。とにかく私が彼女に

時間を割くようになってからというもの、彼女はとても幸せそうだし、私もそうである。そして、仕事もふたり共非常にうまくゆくようになった。」

私はこの経験から、多忙な男性ほどラルフの教訓に従わなければみじめになり、結局仕事の能率も下がってしまうということ学んだ。産科医である私は、職業柄、婦人たちと接する時間が多いので、大勢の婦人から夫の時間の使い方について話を聞く。

パートもまたラルフと同じようにやり手である。その奥さんが私にこう打ち明けてくれた。「パートは昼は仕事で家にいません。そのことは納得しています。でも夜になってもなかなか帰ってこなかったり、帰ってきてでも食事を終えると、すぐに教会の集会に出て行くか、テレビの前でうたた寝するかどちらかなんです。昼も夜もないと同じことですよ。定年になれば変わるでしょうが……まだ10年も先のことです。」

これとまったく対照的なのがルースである。彼女の夫は精力あふれる大企業家で、つい最近も大きな店をひとつ出したばかりである。私はルースに尋ねてみた。「でも、ご主人はますますお忙しくなって大変でしょう。家族と過ごす時間は、ありますか。」

「もちろん、主人は出かけることが多いですわ。でも、家にいる時は何にわずらわされることもなく、とても楽しく過ごすことができます。電話もよくかけてきますし、できる時はいつも私や子供と一緒に連れて行ってくれます。」そして夫の帰りがいかにも待ち遠しいといった風に、「あしたには、主人が帰ってくるんです」と言った。

この主人は、忙しい中で家庭をどう守ってゆけばよいかよく心得ているのである。

もうひとつ私が気付いたことは、仕事や教会の責任で夫が外に出て、家を留守にすることが多くても、大して問題ではない。しかしもし妻との時間を取ることをしなければ、それは何よりも重要な夫婦の関係を無視してい

ることになるということである。

もうひとりの友人で、非常に親切で理解ある監督が、最近私にこう言った。「ドティーと私は今、私がこの責任から解任されたら、ふたりで一緒に過ごす時間を楽しみにしているのですよ。」

私はドティーをよく知っている。間違っても不平を言ったり、夫を支持していないと感じさせたりしない人だが、それでも寂しかったにちがいない。そこで私は言った。「それを今なさったらどうですか。この召しが終わったら、主はまた別の召しを与えられるでしょう。そのことはよくわかってるはずです。」すると監督は抗議して言った。

「でも、今はただ時間がないですよ。」私を知っているステーキ部長に、時間を作ることが非常に上手な人がいる。彼は問題なり集会なりにどれだけの時間をあてるかあらかじめ計算しておき、腕時計のタイマーをかける。お陰で、副ステーキ部長や高等評議員は、アジェンダ通りに進めることと報告は簡潔明瞭にすることを覚えた。ステーキ部長は彼らに家族と過ごす時間を与えているだけでなく、実際に家族と共に過ごすことを期待している。ステーキ部内の奥さんたちもそのことを喜んでいる。

ここで、仕事や教会活動、社会活動が忙しくて家族の時間が取れないという人々に、具体的な提案をしたいと思う。

1. できるだけ委任する。会計書記が一般の書記の仕事や、ワード部のタイピスト、管理人、そのほか歴史記録の仕事までもしよとすると、朝から晩まで働かなくてはならない。まず自分の仕事をして、そのほかのことはそれぞれの人に任せよう。立派な監督とは、副監督をよく訓練し、いつでも自分と交替できるようにしている人である。

ある有能なステーキ部長は高等評議員たちにこう助言している。「集会には問題を持ち込まないで、解決策を持って来て下さい。」問題を話し合うよりも、解決策を話し合うこと

の方が時間の節約になることは確かである。

2. 自分の時間をよく計画する。この中には、仕事を実際にどれだけ時間ですませることができるかの見積りも入る。私の場合、仕事の所要時間を記録しておくようにしているが、それが次の時間を決める時にとても役立つ。会って話す代わりに、メモや電話で仕事をすませることはできないだろうか。家庭を訪問する代わりに、自分の事務室に来てもらうことで、時間の節約はできないだろうか。問題が大きくなる前にすばやく処理したり、問題を未然に防ぐ方法はないものだろうか。

このような予備面接は、監督や長老定員委員会長だけでなく、日曜学校の教師、ホームテイチャー、父親、夫にもできることである。この種の面接が正しく行なわれ、しかもその中で心が通い合うようになれば、そこに一致が生まれ、相互理解の基盤ができ、問題は大幅に減少するはずである。

3. 家庭の夕べ以外に夫婦のための特別な夜を持つように計画する。その夜はだれにも邪魔されずに夫婦の絆を新たにし、強めることに時間を取るのである。

私は自分たち夫婦の例から、夫婦の関係ほど重要なものはないこと、さらにそこに時間をかけるようにすれば、親として、教会で働く者として、また職業人としての時間をかえて節約できることがわかった。

4. 時間を計画する。忙しい人には時間がない。しかし、時間は見つけ、作るものである。もしも2週間前に計画すれば、夫婦でその晩の時間を予約しておくのは簡単である。しかし一日前に言われてもそうそう都合がつくものではない。

よく計画すれば、ごく短時間で良い成果を上げることができる。私は医者で、いつも待合室に大勢の患者を待たせているが、それでも2分間の時間を見つけてゆっくり妻に電話をかけるようにしてきた。妻はそのことを喜んでくれ、私はいつもすがすがしい気持ちで

仕事に取りかかることができた。

さらに妻との時間を持とうと思えば、いつも会っている同僚ではなく、たまには妻と昼食を一緒にしてみることである。愛妻と会い、楽しそうな顔を見て養われる英気は、どんなに理解のある同僚からも到底得られない仕事上の賞与にも匹敵するものである。

5. 互いにほめる。どんな人でも少なくともひとつは良い点がある。それを手がかりにすれば、ほかの良い点も見えてくるはずである。私は妻をがっかりさせないようにいつも細心の注意を払っている。それは、妻に幸せでいてもらいたいと同時に、私も楽しい気分にしてほしいからである。結婚生活で一番大切な言葉は「あなたを誇りに思っています」という言葉である。しかもそれを言うのに5秒とかからないはずである。

モルモン経にはこう記されている。「現世は、人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は、人間が各々働きを遂行せねばならぬ時期である。」(アルマ34:32) ニール・A・マックスウェル長老はこう言っている。「時間を取り返すことはできない。」私たちに与えられているチャンスは一回しかないのである。

どんなに忙しい人でも、妻より仕事の方が大切だと本気で考えている人はまずいない。と同時に、夫が仕事にかけるだけの時間を自分のために使ってほしいと本気で望む妻もまたいないのである。それでも妻は夫に、まず第一に自分のことを考えてほしいと望んでおり、事実そうしてしかるべきである。忙しい男性の皆さんに課せられたチャレンジは、いかにしてまず第一に妻のための時間を取るかということである。そして、それは決して無駄でないことを私は保証する。

(リンゼイ・R・カーチス博士、産婦人科医、現在はカリフォルニア・オークランド伝道部部长)



## 私は幸せです

バトリシア・A・エイジャー

「今」のままで幸せよ。」今から8年前に、母に言ったその言葉が、今でも耳に残っています。

あの時、本当は幸せではありませんでした。時々気がめいって自殺を考えたこともありましたが、一晩中寝ないで自分の進むべき道について考えたこともありました。そして、睡眠薬を使ってようやく眠るといった有様でした。その2年前に、母は末日聖徒イエス・キリスト教会のバプテスマを受けたことを手紙で知らせてきました。けれども、それがモルモン教会だとわかった時、私は「まあ、なんてことをしたのでしょうか」と思ったのです。

それから母は、私たちの家に来るたびに、沢山の書やパンフレットを持って来ました。私に福音の話をしようとするのですが、私はいつも「今のままで幸せよ」と答えています。

た。母が幸せなのはわかりました。福音のことを話すたびに、顔が輝くのです。けれども、私は一向に母の話を聞こうとしませんでした。

私の夫は生粋のインディアンで、私も一部インディアンの血が混じていました。私はこれまでずっとインディアンの研究をしていて、先祖がどこから来たのか知りたいと思っていました。母は、モルモン経を読めばインディアンの由來がわかる、ニーファイ第3書には私が大喜びするようなことが書いてあると教えてくれました。その本が母にとって大切なことがよくわかっていましたし、母を愛していましたので、私はそれを読むと返事をしました。すると母は私にその本と、ほかに数冊の本やパンフレットを置いて行ってくれました。そこで、母が帰った後、私は自分の部屋に行ってモルモン経を読み始めました。読み始めると、途中で止めることができなくなり、毎日寝室を出ては読んだことを家族に教えるようになりました。こうして半月ほどで、その本を端から端まで読み終え、この本が真実であることを知ったのです。

私はそれまで22年間、タバコを吸い続けてきました。そこで、モルモン教会が真実だと知った時に、タバコを吸いたくならないように助けて下さいと、心から主に祈りました。その日から、タバコを吸いたいと思ったことは一度もありません。私は母が置いて行ったパンフレットや「教義と聖約」や「高価なる真珠」や「奇しきみわざ」を読みました。これはみな1969年の秋のことです。そして翌年の春、私は、子供たち、それに妹のデロースと一緒にバプテスマを受けました。それから2年後に、私の姉のキャロリンが家庭の夕べに来て、宣教師の話の聞きたいと言いました。現在では私たち3人姉妹は全員教会員です。私は、本当に助けの必要な時に母を私のところへ送って下さった天のお父様に毎日感謝しています。そして今こそはっきりとこう言うことができます。「今、私はとても幸せです」と。

# 最も大いなる責任



第9代大管長  
デビッド・O・マッケイ  
(1873—1970)

教会の第9代大管長デビッド・O・マッケイは、1873年9月8日、ユタ州ハンツビルで生まれた。1906年4月、32歳で十二使徒評議員会会員として支持され、ヒーバー・J・グラント、ジョージ・アルバート・スミス両大管長の第二副管長を務めた。使徒に聖任されてから45年後の1951年4月6日、教会の大管長に支持された。そして、1970年1月18日、この神権時代の教会幹部の中で最も高齢の96歳で世を去った。

この「最も大いなる責任」は、1953年4月4日、ソルトレーク、タバナクルにおける総大会での説教から抜粋したものである。

**救**い主は言われた。「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。」  
(マタイ16：26)

救い主がヨルダン川でバプテスマを受けられた後、記録にある最初の質問は「あなた方は何を求めているのか」(ヨハネ1：38、欽定訳より和訳)であった。主はマタイ16：24—26で、再び人々の日常の行動を駆り立てる力について述べられた。人が富や名誉や快樂を

求めてあらゆる富と榮譽を手中にしようとも、永遠の富をなおざりにし、放っておいて、なんの得になるだろうか。

こうして主は、物質的な財産と霊的な財産を簡潔にしかも威厳のある言葉で比較対照された。

またある時には、山上の垂訓の中で、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ6：33)と人々に勧告された。神の王国を確立し、神の義を広めようとする

ことは、人生最高の目的としなければならない。

優れた政治家や明哲な教育者が、公の講演や寄稿文中で、現代の靈的貧困なるものについてしばしば語り、高尚な道徳や倫理の標準の必要性を説いている。

末日聖徒は、次の最も大切なふたつの責任を常に忘れてはならない。(1) 自分の家庭を整える。(2) イエス・キリストが神の御子であり、イエス・キリストの教えが人類の救いになればならないことを公に宣言する。

ペスタロッチはこう述べている。「家庭の幸せは地上最高の喜びであり、子供を持つ親の喜びは人間の最も気高い喜びである。それは人々の心を清く善良にし、人々を天の御父に向かわせる。」

もし結婚生活や家庭の高い理想が正しく育まれ、慈しまれていくなれば、大半の人々がそのような喜びを手にするのも決して夢ではない。

ところが、家庭をむしばむ白蟻がいる。その白蟻は、陰口や悪口であったり、親や子供のあら捜しであったりする。中傷は人を毒する。理想的な家庭には、教師や役人や教会の役員を中傷するうわさ話がない。私はかつて父から「先生や人々のあら捜しをしてはだめだ」と言われた。私はその父の言葉を、長い年月が経った今も深く感謝している。

口論やののしり合いは、理想的な家庭の標準を下落させる悪弊である。父親や母親が子供の前で大声でののしり合い、そうした言葉を口にする光景を私は想像することができない。

家庭の幸せを妨げるもうひとつのことは、母親や父親になる責任を回避することである。健康で正常な教会員は、ことに自分の時間を持ちたい、金持ちになりたい、世間と同じ生活がしたい、あるいは子供はふたりまでの方

が良い教育ができるなどといった間違った考えで、子供の数を制限する罪を犯してはならない。これらを弁解の口実としてはならない。それは不正なことである。

予言者ジョセフ・スミスに啓示された結婚の高い理想を踏まえ、教会員はただひとつの目標、すなわち、社会の基盤となる結婚が、子供たちを正しく育て、彼らに福音の原則を教える永遠の家庭を築くものとして神から定められたものであることを常に覚えておくことである。

次の言葉は、必ずや教会の大半の親たちの共感を呼ぶに違いない。

「人の一生はどの時期も素晴らしい。無邪気な子供時代、胸ときめかす青春時代、そして恋愛時代、活力にあふれ、しかも大きな責任を伴う親の時代。しかし、人生の最も素晴らしい時期は、父母が立派に成長した息子や娘の良い友となり、そして孫の姿を見る時代である。……」

少年時代は制約、規制、時間、権威に縛られ、青年時代には謎と憧れ、失敗を繰り返す。父親になりたての頃は問題と仕事に明け暮れ、晩年は永遠の神秘が色濃く影を落とす。しかし普通の中高年齢者が、もしも正しく誠実に人生を歩んできていけば、世の中での成功よりも、子供や孫たちとの交わりに大きな喜びを感じるはずである。

普通の人々は皆人生のサイクルを順次、喜びと満足を体験しながら、幼児期、少年期、青年期、両親の時代、中年期、祖父母の時代を歩む。どの時代にも、経験した者にしかわからない満足がある。人間の幸せの全行程を知るには、私たち自身何度も生まれ変わる必要がある。この地上に初めて赤ん坊が生まれた時、母親が生まれ、父親が生まれ、祖父母が生まれる。このような誕生によってのみ、真実の母や父や祖父母が存在するのである。こ

の自然な人生のサイクルによって人類の発展の大きな喜びに到達できるのである。」(R・J・スプラーク)

すべての教会員は、家庭を整えて調和のとれた家庭生活から来る本当の幸せを享受していただきたい。

またすでに述べたように、第2の大きな責任は、イエス・キリストの神聖な使命を人々に宣言することである。1900年の昔に、この大義を雄々しく擁護したひとりの使徒は次のように述べている。

「このイエスこそは『あなたがた家造りらに捨てられたが、隈のかしら石となった石』なのである。

この人による以外に救<sup>すくい</sup>はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。」(使徒4:11-12)

イエスを救いに導く唯一の御方と呼んだこの人は、当時平凡な漁師であった。彼は私たちと同じように、市井の生活を経験して成長した。彼は夢想家ではない。まったくの実行家であった。かなり裕福で、指導者としての資質を具え、とりわけ正直な人であった。

当時の状況もあって、ペテロはナザレのイエスと親密な関係を持つようになった。3年近くの間、いつもイエスと行動を共にした。その結果、救い主のことをよく理解し、イエスの人生哲学がペテロの人生哲学となったのである。ペテロは徐々にはあるが、慎重な観察眼と心の思いとによって揺るぎない、崇高な確信を得るに至り、ユダヤ議会の指導者たちの審問を受けた時には、ためらうことなくはっきりとこう宣言している。「わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていない。」

さらに教会員は、イエス・キリストの教会が、ペテロやパウロ、ヤコブ、およびイエス

の復活を文字通りの事実としてだけでなく、この地上におけるキリストの聖なる使命を全うするものとして受け入れる他の使徒たちによって立つものであることを宣言する。歴史始まって以来、宗教指導者たちは徳行、節制、自制、奉仕、義に対する従順、義務を説き、さらに至高者を信じ、死後の世界への信仰を教える人々もいた。しかし墓の封印を解き、死を不死不滅と永遠の生命への門戸として明らかにされたのはキリストのみであった。古代の使徒たちが述べた主の復活の確固たる証拠に加えて、予言者ジョセフ・スミスは堂々とこう宣言している。

「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。」(教義と聖約76:22)

キリストが死後再びよみがえられたように、人類も再び生きる。それぞれが地上での行ないに応じて次の世の住むべき場所を得る。愛は生命と同様に永遠であり、したがって復活の知らせほど人々を慰め、人々にとって輝かしいものはない。つまり、たとえ死が愛する人を私たちから奪い去っても、私たちは空の墓をのぞいて、彼はここにはいない、よみがえったと言えるからである。

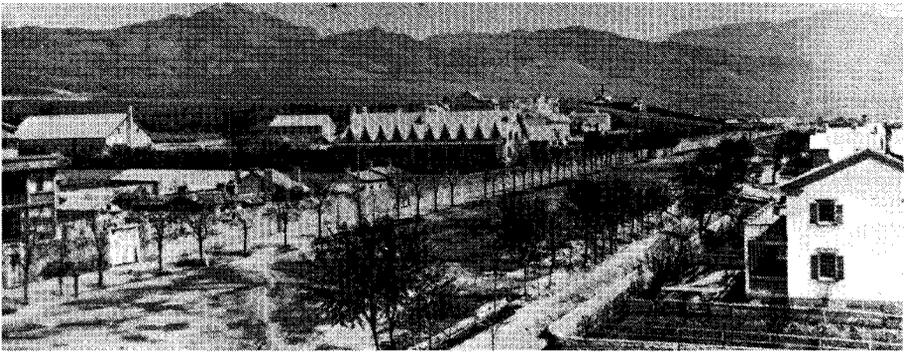
幸せな家庭は家族一人一人にこの地上の天国の経験を与えるものである。さらにキリストの使命が神聖なものであることを認め、キリストの福音の原則に従うことで、不死不滅と永遠の生命が約束されるのである。

私は、キリストの実在とキリストの福音の真理を知ることが人間にとって最高の慰めであり、幸せであることを証する。願わくは世界中の心の正直な、誠実な人々が、この確信を胸に抱く日が速やかに来るようにと祈っている。

# 西部の地で

1847—1877年

グレン・M・レオナード

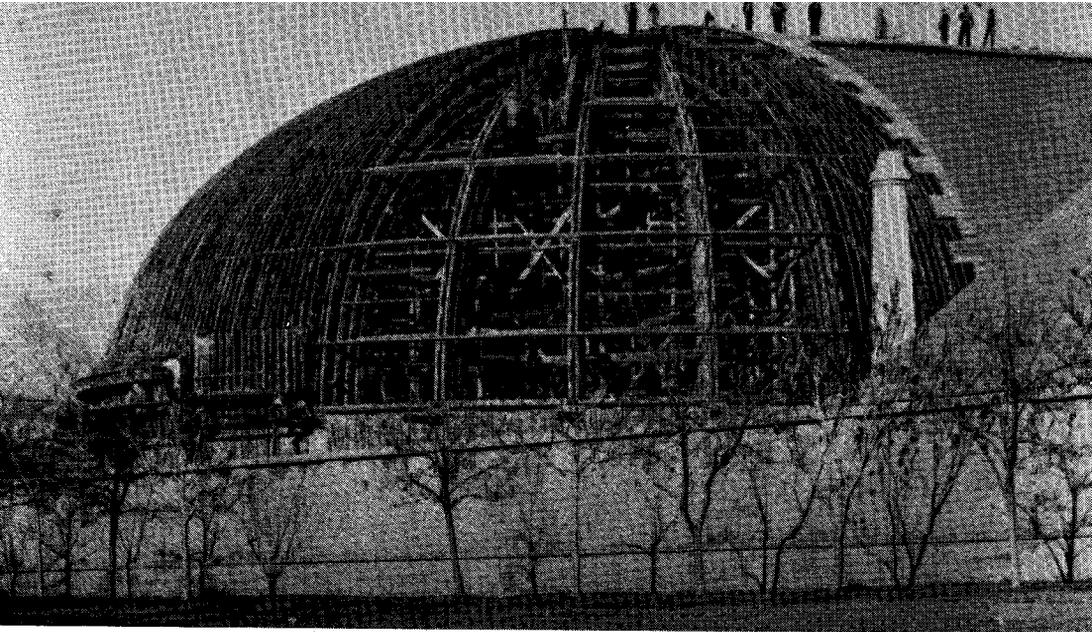


ブリガム・ヤングを大管長とする大管長会の30年にわたる統治の期間に、聖徒たちはノーブーを追われ、その後しばらくの間比較的平穏な時を過ごした。それは教会にとってもきわめて重大な発展の時代となった。これまで悩まされ続けてきた恐ろしい暴徒たちの手を逃れた聖徒たちは、北アメリカ西部に350を越える安住地を開拓することに成功した。教会員の数も3倍（約15万人）以上になった。ブリガム・ヤングは聖徒たちの尊敬と信頼を得て、開拓活動の指導に当たり、ユタ準州の初代知事となった。聖徒たちは、ジョセフ・スミスをはじめその後続く予言者らが紹介した宗教プログラムを実施し、若人のためには新たな補助組織を設けた。また伝道活動が進展し、世界の各地で行なわれるようになった。

1846年にノーブーを去る時、イリノイ州西

部とアイオワ州東部にはおよそ1万4千人の教会員が住んでいた。ノーブー市の住人のほとんどが無事にその地を離れ、また各地に散在する何千人もの聖徒たちが新たな集合地にたどり着けるよう助けることが、教会の指導者の当面の課題であった。この大移動は、6年にわたって行なわれた。その後も50年以上、何らかの形で移住が続けられた。

人里離れた平原や山々を越えて1600キロもの道のりを旅することは、家族にとってつらく、経済的にも苦しいことであった。だれもが3カ月の旅に必要な食糧や荷車、牛を購入できるほど余裕があるわけではなかった。そこで、1849年にブリガム・ヤングはユタの教会員たちに、これから移住してくる聖徒たちのために、援助金と食糧を寄付するよう訴えた。これが永代移住基金の始まりである。こ



れは1887年まで続けられた。ヨーロッパやアメリカの聖徒たちは移住の経費を賄うためにこの基金から必要な額を借り受け、ユタに到着してからそれを返済し、回転資金を補充するのである。

1856年から1860年にかけて、3千人を越える人々（移住者の3分の1）が、アイオワ州アイオワ・シティーの鉄道の終点から、手車を引いたり押したりし、また大きめの荷物は隊ごとに数台の荷馬車に積んで、大平原を越えてきたのだった。

手車隊が開始された年、ジェームズ・G・ウィリーとエドワード・マーティンの率いる第4、第5手車隊は、手車の入手が遅れたために、出発するのが時期的に遅くなってしまった。そのためこの勇敢な開拓者の一団は、ワイオミングの平原で早く訪れた冬のために吹雪に見舞われてしまったのである。到着が遅れるという知らせを受けたブリガム・ヤングは、彼らを救済するために食糧や衣類、運搬用家畜、荷馬車などを集めた。ふたつの隊とも救助されたが、合わせて5分の1、200

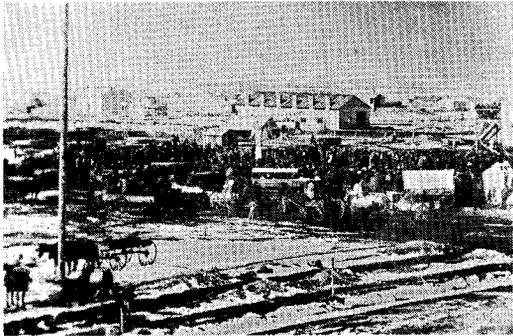
名余りの人が凍死した。そして最後のグループが目的地に到着したのは11月の末だった。

ソルトレーク・シティーにたどり着いた移民たちはヤング大管長や教会幹部に迎えられ、ワード部の会員たちからもてなしを受けた。さらに地元の家庭で居住地が定まるまで、世話を受けた。新しい入植者の中には、新たな地を開拓するために遠くの地を割り当てられる者もいれば、ソルトレーク・シティーで土地を確保し、そこで働く者もいた。

1847年秋までに、ソルトレーク盆地には2千人の開拓者が到着し、比較のおだやかな最初の冬を過ごした。しかし、小麦粉は底をつき、野菜はなかなか手に入らなかった。春になると開拓者たちはセゴユリやそのほかの草の根や葉をとって来て飢えをしのいだ。3月に入ると、その年の食糧を確保するために種をまいた。しかしこれは惨たんたるものだった。かんばつと遅霜のため、作物は台無しになってしまったのである。5月の末になると、今度はイナゴの大群が豊かに実った麦をやっと大きくなりかけた作物を襲った。イナゴを



1867年、工事中のタバナクル(p. 16)



1852年、テンプルスクエアに建てられた最初のタバナクル(p. 17, 上)

1847年7月28日、ブリガム・ヤング大管長、ソルトレーク神殿用地を定める。そして、1853年2月14日、ヤング大管長が鋤入れをし、次いでヒーバー・C・キンボール長老が神殿用地を奉獻する(p. 17, 下)

た。さらに幸いなことに、沢山の荷物を持ってきた金掘り人や商人が、余分な衣類や器具、道具を途方もなく安い値段で譲ってくれたことである。お陰で、ユタの開拓者の経済は潤い始め、教会は再び教会員に伝道活動に力を注ぐよう呼びかけることができるようになったのである。

ノーヴー時代に、ヨーロッパ北部では大勢の改宗者たちが生まれたが、この時代も改宗者はあとを絶たなかった。そして1850年代には、ラテンアメリカや太平洋諸島、アジア、インド、南アフリカへ伝道するために宣教師が送られた。

1849年の10月の総大会で、ヤング大管長は南カリフォルニア、タヒチ、イタリア、スイス、デンマーク、スウェーデン、アイスランド、フランス、ドイツ、英国に伝道するために宣教師を召した。ロレンツ・スノーとジョン・テイラー両長老は、中央および南部ヨーロッパ、エラスタス・スノー長老はスカンジナビアで働くよう召された。翌年、パーレイ・P・ブラット長老は南アメリカに向かい、ジョージ・Q・キャノン長老一行はハワイに渡った。1851年には、オーストラリア、ニュージーランド、タスマニアで伝道が始まった。翌52年8月の特別大会で、ジブラルタル、マルタ、プロシア、南アフリカ、ジャマイカ、中国、台湾、セイロン、インドに伝道するために宣教師が送られることになった。実際この地でも、宣教師たちは強固な反対にあった。ヨーロッパ北部を除いて、改宗者を出すことはほとんどできなかった。1850年代に開

水攻めにしたり、つぶしたり焼いたりしたが無駄であった。その年開拓者たちはわずかな作物しか収穫できなかった。しかし、グレートソルト湖の島々からカモメの大群が助けに来てくれなかったら、被害はもっとひどいものになっていただろう。カモメはイナゴを腹一杯詰め込み、大切な作物を救ってくれた。聖徒たちは主の、時を得たこの助けに心から感謝したのである。

2年目の冬(1848—49年)は、モルモンの開拓者たちに容赦なく襲いかかってきた。人も家畜も打撃を受けた。薪を手に入れることさえできず、食糧も乏しくなってきた。ある家族は生皮を煮て栄養を補うほどであった。余分な食糧を持っている人はない人に惜しみなく分け与え、互いに助け合った。

1849年のゴールドラッシュでは、西部に向かって旅立った大勢の人々が、目的地までの最後の関門である砂漠を越える前に、ソルトレーク・シティーに立ち寄った。そこで聖徒たちはかじ屋をしたり家畜を売ったり、交換したりして、これらの旅人から直接利益を得

かれた新しい伝道地の大部分が、まだ福音を宣べ伝えるにふさわしい状態ではなかったからである。成功をおさめたのは、ヨーロッパからの移民、オーストラリアやニュージーランド、ハワイのポリネシア系の人々に対する伝道だけである。

1850年代の中頃にユタに帰還した長老たちの多くは、末日聖徒の参政権擁護のために働くよう召された。1856年に、連邦政府より任命を受けたある準州官吏が、ジェームズ・ブキャナン大統領に偽りの報告書を提出した。その報告書を鵜呑みにした大統領は、ありもしない暴動を鎮圧するために、ユタに連邦軍を送ったのである。その上、準州知事のブリガム・ヤングに代わるアルフレッド・カミングを送った。

大統領のそのような行動を知ったヤング知事は、こちらに向かってる軍隊がユタに入ってから暴徒と化し、以前無統制の州兵が行なったように、罪のない住民を射殺し、財産を破壊するのではないかと恐れた。そこでヤング知事は聖徒たちにユタ北部へ疎開するよう命じた。聖徒たちは所持品をまとめて荷車に積み込み、南からソルトレーク・シティーを越えて北方へと向かった。さらに準州軍に、兵士の命を危うくすることなく連邦軍の接近を遅らせるようにという指示を出したのだった。

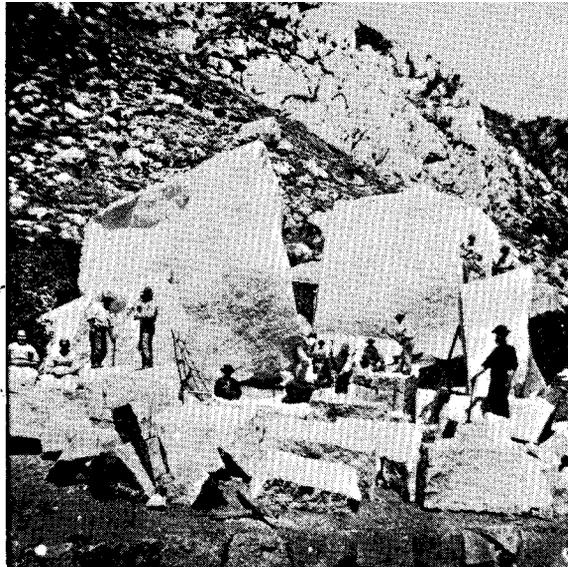
その冬、軍隊がついにソルトレーク盆地に到着した。ヤング知事は教会に好感を寄せている仲介者トーマス・L・ケインと共に自分に代わって新しく知事になる人を迎えた。そして結局ワシントン当局の誤解であることがわかった。こうして、聖徒たちは自分の家にもどり、カミング知事は正しい施政者として人々の信望を得ることができた。

1860年代と1870年代、教会はますます発展していった。ほとんどすべてが教会員であるモルモン定住地では、ワード部の活動が中心の生活であった。ワード部交流会、ダンス、

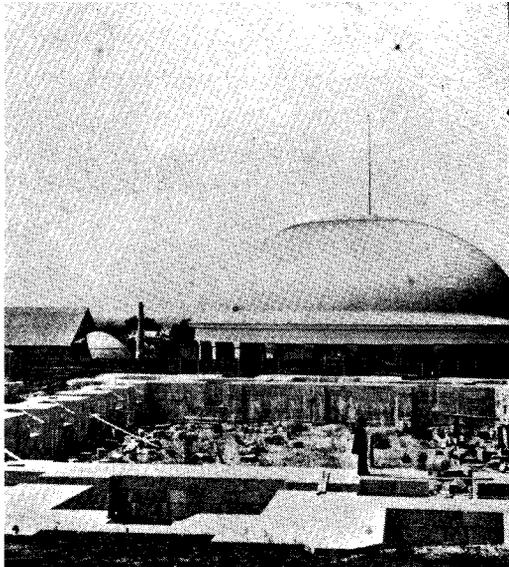
演劇、合唱が行なわれた。(1860年代までは、ワード部の規模は様々であり、子供のための日曜学校以外補助組織はまだなかった) 監督がその地域の中心的立場に立ってその役割を果たしていた。監督はワードティーチャーを管理し、監督の代理として会員たちの俗事に関わる事柄が行なわれているかを見守る責任があった。すなわち、乏しい灌漑用水の使い方ははじめ、地域の家畜の世話、教会堂の清掃管理、未亡人への援助についても心を配った。毎週聖餐会では、福音の教えを説くと同時に、へいの修理や薪の運び方などの実際的な事柄についても助言が行なわれたようである。

末日聖徒独自の孤立社会は、1860年代に急速に終わりを告げた。それは、ソルトレーク・シティーの近くに駐屯していた兵士たちが金銀の豊かな鉱床を発見したからである。金を目当てに大勢の人がユタに群がり、大規模なモルモン社会に新風を吹き込んだのである。外からの流入は、1869年に大陸横断鉄道が開通すると一段と激しさを増した。鉄道は、大陸横断の手段として、間もなく大幌馬車隊にとって代わった。今や、貨物人も比較的容易にユタに到達できるようになった。開拓の時代は終わったのである。

しかし、東部の品物が流入しやすくなったことによって、ユタの自給自足経済が脅かされ始めたため、教会の指導者は、ユタの自立を確保する財政プログラムに取り組んだ。1860年代の末期、ブリガム・ヤングは後に協同組合と呼ばれる運動を始めた。ワード部ごとに消費組合の売店と各地域の特色を生かした独特のもの、すなわち家畜、ほうき工場、製皮所、チーズ工場などを併せて行なうよう勧めた。教会員はこれらワード部の経営する会社の株を買い、地元の経済が発展するにつれ、地域社会全体もその恵みにあずかれるようにしたのである。しかし、これらの企業の大部分が、質や価格の点において輸入品に太



神殿用地から約30キロも離れたところにある石切り場から牛車や汽車で運び出される花崗岩



高さが5メートル以上もある、ソルトレーク神殿の土台

刀打ちすることができず、次第に解体するか、あるいは大株主に買い上げられるという始末であった。

1870年代の中頃になると、末日聖徒は青少年の教育や家庭の強化を主眼とした教会活動の必要を感じてきた。そこで、1867年には扶助協会が再組織された。次いで、ヤング大管長の指示の下に、扶助協会はすべてのワード部に若い女性のための相互発達協会を設置した。また1875年には、青年男子相互発達協会が発足した。日曜学校も、この時までには地元の意向でしか組織されていなかったが、1867年にジョージ・Q・キャノン長老の指示の下に教会のプログラムとして広く行なわれるようになった。

教会の結束力の強まりは、建築プログラムひとつをとってもよく表われている。1863年に着工したソルトレーク・タバナクルは1867年10月に完成し、アーチ型の屋根をした建物の中で総大会が開かれることになった。1871年にブリガム・ヤングは、ユタ南部とネバダの人々のためにセントジョージに神殿を建て

るよう聖徒たちに指示した。1877年4月、この神殿は年老いたヤング大管長によって献堂された。また、この年の春、ローガンとマンタイ神殿の敷地が奉獻された。これは大管長が世を去る数カ月前のことであった。セントジョージ神殿は、ノーウーを追われて以来20年にして、ついに完成した最初の神殿であった。(開拓時代は、ソルトレーク・シティのテンプルスクウェアにあるエンダウメントハウスが一時的に使われていた)

末日聖徒たちがこれら初期の神殿を完成できたのは、一致した献身と犠牲があったからである。ソルトレーク盆地に到着した4日後、ブリガム・ヤングは神殿のために選んだ土地に鋤を入れた。そして建築に当たって多方面で指示を与えたが、ついに生きてその完成を見ることはなかった。ブリガム・ヤング大管長時代の使徒であったウイルフォード・ウッドラフが後に大管長となり、着工から40年後の1893年4月に、ソルトレーク神殿を献堂したのであった。

# 教会および世界史年表

1847—77年

## 教会

- 1847 開拓者たちソルトレーク盆地に到着する。  
ブリガム・ヤング、第2代大管長となる。
- 1850—  
54 ヨーロッパの各地で伝道が始まる。  
太平洋諸島、インド、南アメリカでも始まる。
- 1852 多妻結婚の教義が公式に発表される。
- 1857 連邦軍ユタに向かう。
- 1867 タバナクル完成。
- 1869 若い女性リトレンチメント（儉約）協会（後のYWVIA）組織される。
- 1874 協同制度を敷く。
- 1875 青年男子相互発達協会が組織される。  
ブリガム・ヤングアカデミー（後のブリガム・ヤング大学）がユタ州プロボに設立される。
- 1877 ブリガム・ヤング死去。

## 世界

- 1846—  
1932 ヨーロッパからアメリカおよびアジアに大規模な移住が行われた。
- 1848 ヨーロッパ各地で改革の火の手が広がる。
- 1849 カリフォルニアでのゴールドラッシュ
- 1850—  
55 中国で長髪賊の乱が起こる。
- 1853—  
56 クリミア戦争
- 1859 チャールズ・ダーウィン「種の起源」を出版。
- 1861—  
65 合衆国南北戦争
- 1864 パスツール殺菌法の発達。
- 1865 最初の消毒外科手術。
- 1866 プロシアとイタリア、オーストリアと戦う。
- 1868—  
1912 日本、明治維新、西洋化、近代化。
- 1869 スエズ運河開通。アメリカで最初の大陸横断鉄道が、ユタ準州プロモントリーで結合する。
- 1870 イタリアの統一終わる。
- 1870—  
71 仏露戦争。ドイツ統一、1871年。
- 1876 電信開通。



# ちい とも 小さなお友だちへ



## ルイザとカモメ

お話し：シャルラ・ツイーマン

朝あさです。まどから日の光ひかりがさしこんで、きらきら光ひかっています。ルイザはせのびをして、カモメのこゑ声こゑを聞いています。カモメは、まるで、あそびに出ておいで、と鳴なっているようです。カモメは、朝あさごはんの虫むしを食たべに来くるのです。ときには、ネズミを食たべることもあります。ルイザは、ときどき自

分ぶんがカモメになれたらいいなと思おもうことがあります。だって、カモメは山やまのうへ上に日ひがのぼると、いつも野原のほらをこえてとんで来て、しばらくすると、またとんで行ってしまいうのですから。

ルイザはそつとベッドをぬけ出だして、家いえの外そとへ出でて行いきました。お父とうさんがたてたちい小さな2ふたかいだての家いえです。

ルイザは、お氣きに入いりの場ばしょにすわって、みうごきもせずずに、カモメを見みていました。茶色ちやいろのかみの毛けがかたにかかり、青あおい目めはきらきらかがやいていました。

また、ドアがギーンとあきました。小ちいさな弟おとうとのトマスが、そおつと、やっきて来て、ルイザのとなりにすわりました。野原のほらのむこうの森もりからは、お父とうさんが木きを切きる音おとが聞きこえてきます。そして、にわからは、お母かあさんの歌うた声こゑが聞きこえます。トマスはまだねむそうそでカモメをじつと見みています。

「冬ふゆが来るから、お父とうさんは木きを切きっているのよ。お母かあさんもやさいの手て



入れをしているの。」ルイザはカモメがにげないように、小さな声でそっとういしました。

「ねえ、カモメのお話、してよ。」トマスはねむそうにいました。

トマスはまだ小さいので、みんなでのぼらをたびして、ユタへやって来たことをおぼえていません。でも、ルイザは、おぼえています。

「牛車に、おなべや、おさらや、食物やふとんをつんで、長い長いたびをしたのよ。わたしは、お人形ももって

きたわ。わたし、牛をはじめて見たの。大きな山みたいだったわ。」

「ねえ、ルイザ、カモメのお話は？」トマスは、たびの話がきらいなのです。

「はじめにユタに来た年にはね、お父さんとお母さんのお手つだいをしてはたけに、たねをまいたの。」

「ぼくはどこにいたの。」

「まだ小さかったから、はたけのそばを、よちよち歩いてたわ。それから、めが出て、このくらいの高さになったとき、イナゴがやって来て、はた





けの作もつを食べはじめたの。」

「イナゴってなあに」

「虫よ。」

「もうっ、カモメのお話してったら」

ルイザは、かまわずにつづけました。

「みんな、ぼうやシャベルをもって、イナゴをたたきはじめてたの。でも、どんどんイナゴがやって来て、どうにもなくなっちゃったの。作もつは、みんなイナゴに食べられちゃうかと思っただわ。」

ルイザの目からなみだがあふれました。もうルイザは8さいです。なくのはおかしいのですが、ときには、がまんできなくなるのです。

「カモメはいつ出て来るの」トマスがききました。

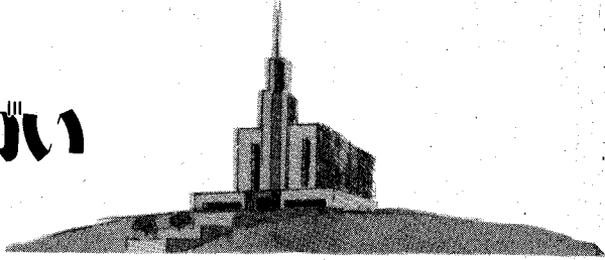
「お父さんもお母さんも、みんなといっしょにおいのりにしたの。はたけの作もつをまもってくださいって。そのとき、空の方からガヤガヤいう声がかきこえたの。はじめは、またイナゴが来たかと思ったわ。カモメなんか見たことがなかったのですもの。」

ルイザは、トマスにつづきをせがまれるのをまちました。でもトマスは何もいいません。ルイザは話しつづけました。

「ところが、それがカモメだったの。カモメがいっぱいやって来て、イナゴを食べはじめたの。それまでだれも、カモメなんか見たことはなかったわ。見たという人もいるけれど、わたしは、天のお父さまが、わたしたちのおいのりを聞いて、おくってくださいったのだと思うわ。トマスはどう思う？」

トマスはこたえませんでした。もうぐっすりとねむっていたのです。青い空には、まっ白な雲がぼっかりとうかんでいました。

# ジャネットのわがい



お話：マージョリー・ビー・ニュートン

ジャネットはオーストラリアの女の子です。ジャネットは、すなはまにねころんでいました。オーストラリアの海べでは、ときどき強い風がふいて、およげなくなります。そんなときは、夕方になって風がやむのをまつのです。

ジャネットは海を見ながら考えました。「みんなは、海のむこうのニューゼーランドに行けるのに。わたしも行けたら……なあ。」

ジャネットのお父さんは、しぶ長さんでした。会いんたちは来月、ニューゼーランド神でんへ行っ、家ぞくのむすびかためをするのです。でも、ジ

ャネットの家ぞくには、十分なお金がありませんでした。

お母さんはよくこういいました。

「リチャードぼうやが生まれたときに、ちょ金をみんなつかってしまったの。だから、今年には行けないわ。」

ジャネットは、よくすなはまに行っ、考えごとをしました。

お金がかりられるところはないんだわ、とジャネットは思いました。おじいさんはお金もちでしたが、お金はかしてはくれません。おじいさんは、お母さんが教会に入ったことも、お父さんとけっこんしたことも、ゆるしてく



れていないのです。

ジャネットはおじいさんが好きでしたが、めったに会ったことはありません。行ってみようかな、とジャネットは思いました。

次の日、学校がおわると、おじいさんの家へむかいました。少し、むねがどきどきしました。おじいさんの家はひろいベランダのついた、大きな家でした。ドアをたたきましたが、だれも出てきません。犬のブルーイがほえるばかりです。

うらにわにも、おじいさんはいません。ふと見ると、ブルーイの水いれがからっぽになっています。

「まあ、ブルーイ、おじいさんはびょう気なの。こんなにあつひ日に、お前に水をやるのをわすれるなんて。」

ジャネットは、家のうらの方へ行ってみました。

「たすけてくれ」ひくい声が聞こえました。遠くの方から聞こえてくるのです。にわをよこぎり、野さいばたけをこえて、大きな木のかげまで、ジャネットは走りました。するとそこにあるニワトリごやのかげに、おじいさんがたおれているではありませんか。

「木のねっこにつまずいて、こしをうってしまったのじゃ。」おじいさんは、うめきながらいました。「だれも

たすけに来てくれんかと思つたよ。」

「ああ、ごめんなさい。おじいさんすぐにたすけをよぶわ。」

ジャネットは家の中へ走って行って、びょういんへ電話をかけました。やがて、きゅうきゅう車がやって来て、おじいさんは、びょういんへはこばれました。

しばらくして、お父さんやお母さんが、かけつけて来ました。おじいさんは、ジャネットの手をにぎっていいました。

「お前が来てくれたとき、ほかのだれが来てくれるよりも、うれしかったよ。しかし、なぜあんなときに、来たのだね。」

「わたし、さびしかったの。おじいさんと、友だちになりたかったの。」

「わしは、がんこじゃったよ。わしも、家ぞくと一しょにくらしたい。よくなったら、みんなと教会に行こう。」

お父さんは、にっこりとしていいました。

「教会でもそう教えているんですよ。いつか、くわしくお話します。わたしたちは来月ニュージーランドの神でんへ行って、家ぞくのむすびかためをしたいと思つていました。でも来年までまてば、おじいさんもいっしょに、むすびかためることができますね。」

ちい  
小さな  
とも  
お友だちへ



お話し：フランクリン・ディー・リチャーズ長ろう

わ たしのお父さんとお母さんは、はたらくということが、とても大せつなことだと考えていました。

わたしは、家ぞくの中で一番小さかったのですが、それでもやはり、はたらきました。わたしがなまけないように、そして、せきにんをもってはたらくように、お父さんはわたしに、トリごやのしごとをいつけました。50ばかりのニワトリに、えさと水をやり、トリごやのそうじをし、タマゴをあつめるしごとでした。

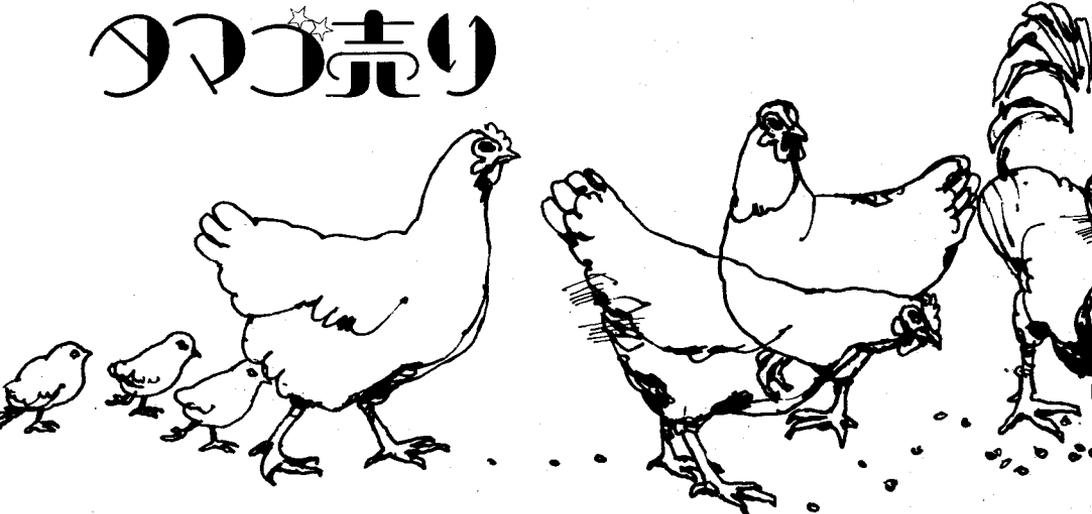
夏には、かりとったしばふをトリご

やのやねの上<sup>うえ</sup>にのせてかわかし、ふくろにつめました。冬<sup>ふゆ</sup>になったら、それにおゆをかけて、ニワトリに食べさせるのです。

このようにして、よくせわをしてみると、ニワトリはたくさんタマゴを生まみます。家ぞくが食べる分<sup>ぶん</sup>をとってもタマゴがあまったら、だれかに売<sup>う</sup>って、お金<sup>かね</sup>は自分<sup>じぶん</sup>のものにしてもよいとよいしました。

近<sup>きん</sup>じよのひとたちは、新<sup>あたら</sup>しいタマゴをととてもよろこんでくれました。すぐにおとくいさんができて、よい友だちに

# 卵の売り





なりました。

わたしはまだちい小さな子こどもでしたが、  
自分じぶんではたらいかねてお金かねをもらっている  
と、おとなになったようなきもち気もちでし  
た。タマゴう売りのほかにきんも、近きんじよの  
人ひとたちからたのまれるしごともしまし  
た。ですから、ちよきん金きんもたくさんでき  
ました。

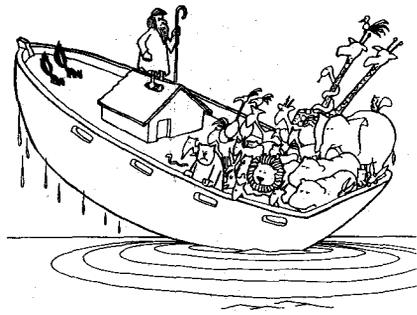
お父とうさんとお母かあさんは、什分じゅうぶんの一いちに  
ついても教おしえてくれました。もらった  
お金かねの10分ぶんの1かみは神かみさまにかえさなけ  
ればなりません。そして、神かみさまに愛あい  
をしめし、神かみさまのおめぐみにかんし  
ゃするのです。什分じゅうぶんの一いちは神かみさまのい  
ましめでもあります。

一年いちねんのおわりに、わたしは什分じゅうぶんの一いち  
をおおおきなふうとうふうとうに入いれて、かんとくとく  
のところへもつって行き、めんせつつをう  
けました。ふうとうふうとうの中なかには、5セント  
玉たまや10セント玉たまがいっぱい入はいって  
いました。そのときときのりょうしゅうしょ  
をまだもつっています。そのときとき、わた  
しは8さいでした。

わたしは、はたらくことことのよろこび  
と什分じゅうぶんの一いちの大たいせつつさを教おしえてくれた  
お父とうさんとお母かあさんに、かんしゃして  
います。什分じゅうぶんの一いちをまもつているので  
わたしは、たくさんのめぐみをうける  
ことができます。

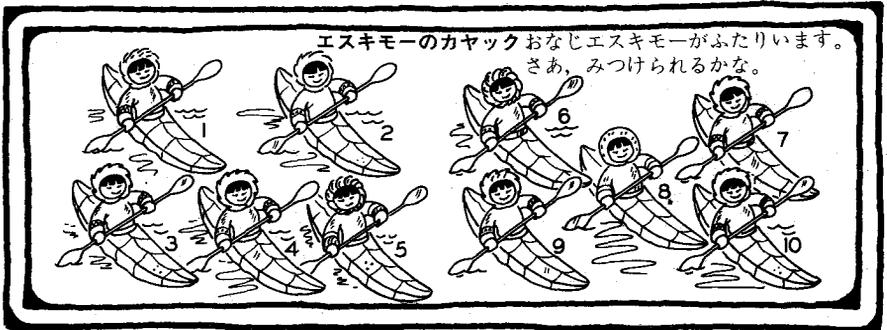
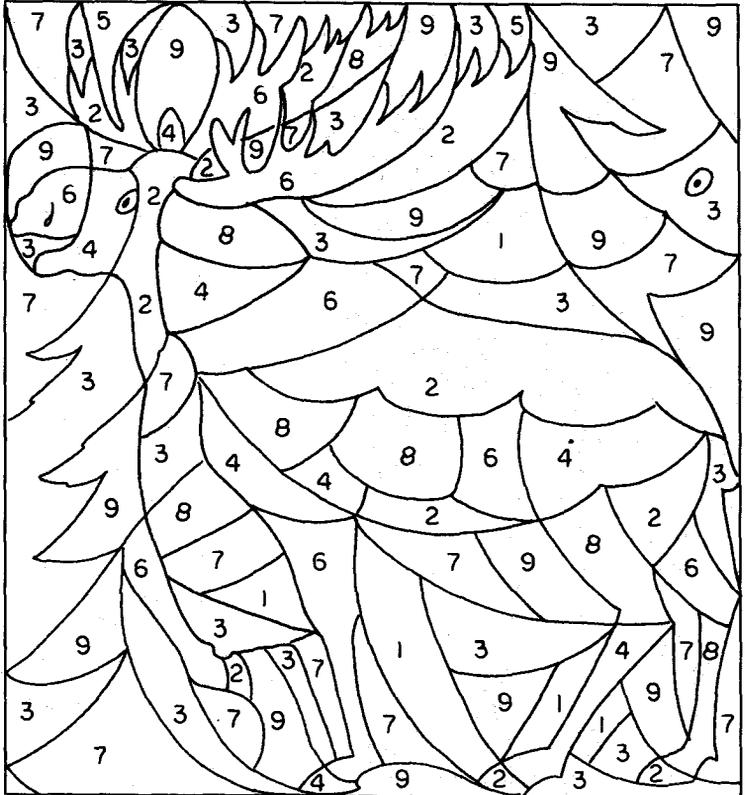


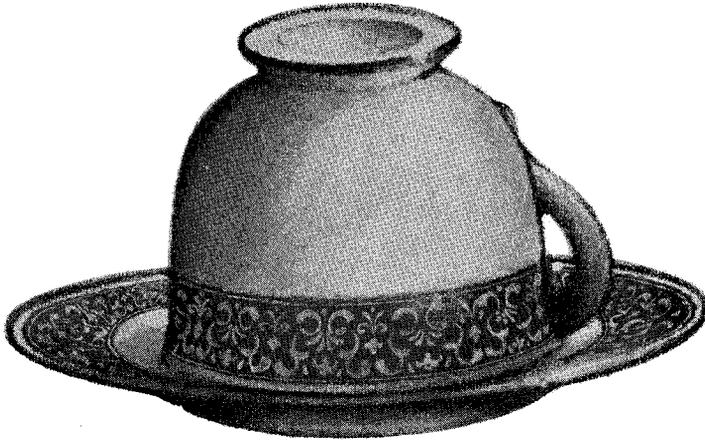
# おもちゃばこ



なにがいののかな？

2, 4, 6, 8  
のところをぬり  
つぶしてごらん  
なさい。おおき  
などうぶつがか  
くれていますよ。





## 標準を尊ぶ

エズラ・タフト・ベンソン

**私**がアメリカ合衆国のドワイト・D・アイゼンハワー大統領の閣僚として農務長官を務めていた頃、イタリアのローマで開催された世界食糧農業機構の年次大会に招かれ、そこで基調演説を行なうことになった。この世界的な大会にはおよそ60カ国から70カ国に及ぶ代表者が出席していた。

演説が予定されていた午前部の部が終わると、私のために宴会場で、盛大な昼食会が開かれた。会場は世界各国の国旗で埋まっていた。

昼食に先立って、恒例のカクテルで乾杯を交わす時がきた。私は人々が手にしたグラスを見て驚いた。そのグラスに入っているのはアルコールではない。普通のオレンジジュースやソフトドリンクだったのである。私は主催者のインドのセン博士にこう告げた。「皆さんにはお酒を出された方が良いのではありませんか。それが、慣例でもありますし……」するとセン博士はこう答えた。

「いいえ、長官。きょうの主役はあなたです。あなたの標準に従いたいと思います。」

友好を深める時間が過ぎると、私たちは食事の席に着いた。驚いたことに、この時もコーヒーの代わりにソフトドリンクとフルーツジュースが出された。私はセン博士に、「皆さんは、きっとコーヒーをいただきたいと思っていますよ」と言った。彼は優しく笑って、こう答えた。「いいえ、主催者は私です。そして、あなたがこの会の主賓です。ですから、この昼食会ではあなたに敬意を表して、あなたの標準に従いたいと思います。」

それも、世界各国の著名な指導者が出席している昼食会でのことである。どのような教員も自分たちの守っている標準のために恥をかくようなことは決してない。むしろ、教会の標準を守ることによって得る報いの方がはるかに大きいであろう。

今から何年も昔、私が遠く離れた英国で学校に通っていた頃の話である。私は星に絶対の信頼を寄せている老学者と知り合いになった。彼はとにかく一生懸命私に占星術の神秘を教えてくれた。私は次第に渴きを覚えるようになり、ついにこの過ちの泉の水を味わうようになった。まだ子供である私は、何の疑いもなく彼の言葉を信じたのである。そして10歳になる頃には、すでに天宮図を繰るようになっていた。

私の学校の友達に、体の大きい、暴れん坊がいて、腕力で辺りの遊び場を支配していた。とにかく、彼が一番強いことはだれの目にも明らかであり、どうしても彼に一目を置かざるを得なかったのである。その上、私たちに自分の算数の宿題をやらせたり、地図や作文をかかせたりした。もしだれでも彼の権力を疑う者が現われようものなら、即座に厳しい制裁が加えられ、反逆者は服従させられた。

さらに悪いことに、彼は金持ちの息子であり、先生のお気に入りでもあった。

私は星占いをしてみることにした。そして、自分たちを縛っている鎖を断ち切り、仲間たちを解放しようと思った。私はこのガキ大将ベンの妹から、首尾よく彼の誕生日と生まれた正確な時間を知ることができた。それを手に、私は大急ぎで家に帰り、すぐに彼の天宮を計算し始めた。何と、私が想像していた通りであった。ベンは土星の子であり、しかも土星が凶相にある時に生を受けたのである。不誠実も、卑劣さも、残忍さも、何ら不思議なことではなかった。そこで、私は天宮図を使って未来を占い、自分に運が向いてくる時を捜した。一週間後の水曜日午後5時、この時刻に彼の星は傾き、私の星が昇る。解放の日は、間もなくやってくるのだ。天宮は危険なかけをする私に味方し、必ず勝利が訪



## 占星術の 思い出

ジェームズ・E・タルメージ

れるはずだ。優れた知識の力によって暴力に打ち勝つのだ。

その約束の日の朝、私は土星の支配を受けらるガキ大将に立ち向かった。挑戦状をたたきつけ、これからだれが支配者になるか決着をつけようと、夕方の5時に対決することにしたのである。彼は大声で笑い、耳のあたりを小突いた。しかし、私はじっと我慢した。報復の時は、まだ来ていないからである。その日は一日中、私の勝利を願う大勢の人から激励を受けた。

5時に定められた場所に行くと、そこには20人余りの少年が集まって、すべて公正に行なわれるように見守っていた。相手は私より30センチ高く、体重も7キロほど多かった。しかし、それはささいな事でさして気にも留めなかった。天宮が喜ばしい勝利を約束していたからである。私はたくましい体つきの相手に向かって、これまで力まかせに、しかも残忍な仕打ちを受けてきたことを述べ、今後自分たちは一切自由であることを華々しく宣言した。これはますます敵の嘲笑をかう形となり、ついに戦いが始まった。

けんかは激しかったが、すぐに終わった。次第に意識を取り戻すと、私は地面に横た

わっていた。ほおは切れ、眼のまわりにはあざができ、鼻を強打されていた。おまけに、歯が2本ほど折れ、毛も引き抜かれていた。相手は、かすり傷ひとつせずには立ち去った。

私は家に向かってよろよろと歩きながら、今までになく考え込んでいた。生まれて初めて占星術に疑いを持ったのである。家族は私の姿を見て、まったく驚いていた。父は何度

もけんかを戒め、繰り返し私に注意した。そして、さらに私の心に刻み込むために、帯ひもの締め金の先端で何度も私を打ったのである。

これには私は懲りた。もう疑うこともなかった。と同時に星占いを信じる気持ちも一気に消えてしまった。その時、占星術はまやかしてでしかないことがわかったのである。

## 占星術について 聖典は何と言っているか

レビ記19：31

「あなたがたは口寄せ、または占い師のもとにおもむいてはならない。彼らに問うて汚されてはならない。わたしはあなたがたの神、主である。」

申命記18：9—14

「あなたの神、主が賜わる地にはいったならば、その国々の民の憎むべき事を習いおこなってはならない。あなたがたのうちに、自分のむすこ、娘を火に焼いてささげる者があってはならない。また占いをする者、卜者、易者、魔法使、呪文を唱える者、口寄せ、かんなぎ、死人に問うことをする者があってはならない。主はすべてこれらの事をする者を憎まれるからである。そしてこれらの憎むべきことのゆえにあなたの神、主は彼らをあなたの前から追い払われるのである。あなたの神、主の前にあなたは全き者でなければならぬ。あなたが追い払うかの国々の民は卜者、占いをする者に聞き従うからである。しかし、あなたには、あなたの神、主はそうすることを許されない。」

イザヤ書8：19—20

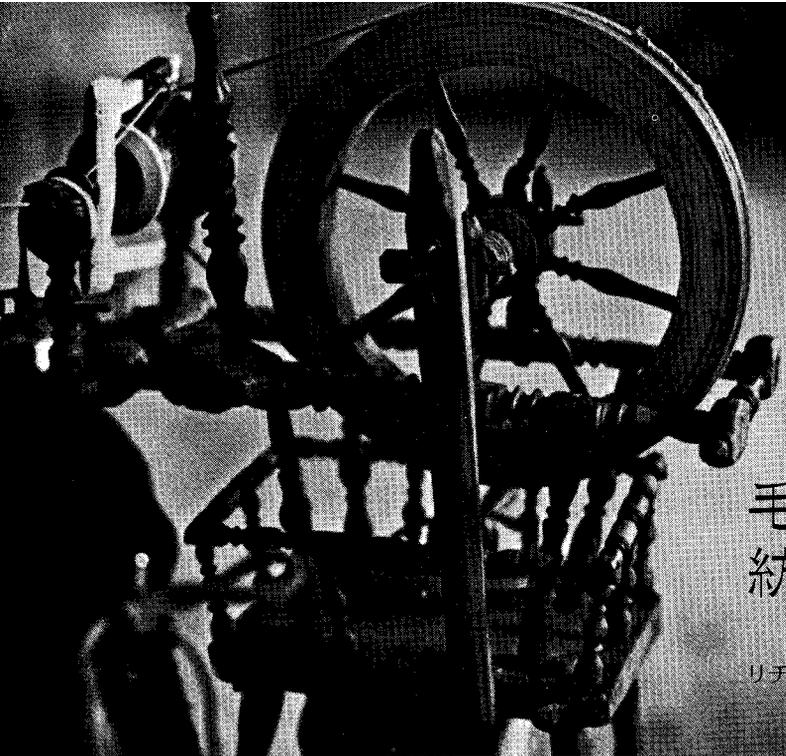
「人々があなたがたにむかって『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであらうか。ただ教とあかしに求めよ。まことに彼らはこの言葉によって語るが、そこには夜明けがない。」

ダニエル書2：27—28

「ダニエルは王に答えて言った、『王が求められる秘密は、知者、法術士、博士、占い師など、これを王に示すことはできません。しかし、秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らせたのです。』」

列王紀下23：5

ヨシヤ王は、偶像を崇拜する「祭司たちを廃し、またバアルの日と月と星宿と天の万像とに香をたく者どもを廃した。」



## 毛糸を 紡ぐ家族

リチャード・M・ロムニー

17歳のヘルガ、14歳のルース、そして11歳のペトラの3姉妹は、しばしば戸口に立って羊毛を買って帰る父親を待っていた。父親のカンドラー兄弟は、オーストリア・アルプスの山々を歩き回っては羊飼いかから羊毛を買集めてくる。それも、羊から刈り取って洗い、毛ばたて機にかけてごみを取り、糸状になった羊毛である。この羊毛は真っ直ぐに延ばしさえすれば、すぐにでも紡いで毛糸にすることができる。

今度はまた、特にみんなが驚くようなことが待ち受けていた。カンドラー兄弟が、小羊からとったいつもの白と灰色の羊毛のほかに野羊からとったこげ茶色の羊毛を持って帰ってきたのである。娘たちは飛び上がって喜んだ。毛の短い、黒い糸は紡ぐのがなかなかたいへんだが、家で紡いで学校や仕事に着ていく服を編むと、いろいろと変化をもたせることができる。

カンドラー家には、100年以上も古くから

伝わる家宝の糸車がある。そのほかにも年代の異なる古い糸車が数台あり、家族中の者が一度に紡いでもまだ一台あまるほどである。

紡ぐこと自体は、一度覚えてしまうとそれほど難かしいことではない。「私は3日で覚えたわ」とペトラ。カンドラー兄弟は、カンドラー姉妹が娘たちに教えるのを見ていてたった1日で覚えてしまった。今では、娘たちと同じように紡ぐことを楽しんでいる。

ルースは言う。「ただすわって糸車を回せばいいの、簡単よ。話をしてもいいし、考えごとをしてもいいの。それでも、ちゃんと紡ぐことができるわ。」また、娘たちが時々楽しそうに両親と並んで糸を紡ぐ技術を競い合っている光景も見られる。彼らは笑い、そして冗談を言い合う。年下のペトラの毛糸がうまく巻けなくなると、ふたりの姉が手を貸してやる。傍らでは、カンドラー姉妹が満足そうにうなずいている。

カンドラー一家が住んでいるユーゲンドル

フのような小さな町では、電気代が高い。そこで人々は、窓越しに射し、壁に照り返す陽の光で部屋を明るくして仕事をする。みんなが糸車のペダルをバタパタと踏みながら指で一本一本糸糸を、糸巻きにかけている。そのそばで、ヘルガはギターをかき鳴らしている。その音色といい、澄んだ声といい、テレビやラジオの騒々しい音よりはずっと仕事の雰囲気高めしてくれる。カンドラー兄弟はこう語っている。「私たちは、いつも家族そろって何でもするようにしています。テレビはないんですよ。」時折、隣の11歳になるマイケル・マークのような友達がこの輪に加わってくることもある。

きょうは、(写真屋が家族の写真を撮りにくる)特別な日なので、家族は全員、この地方特有の民族衣装で着飾っていた。大抵のオーストリア人がそうなのだが、彼らも年に何度か普段の日に伝統的な民族衣装を着て盛装することがある。しかし、家族全員が同じ日に

着飾ることはめったにない。ヘルガは、民族衣装が実用的なことを次のように言っていた。「これだと気軽に着ることができるんです。だって流行に遅れることもないし、それに、年齢に関係なく着れるんですもの。もちろん、私たちは普通の洋服やジーンズも着ますけど。」

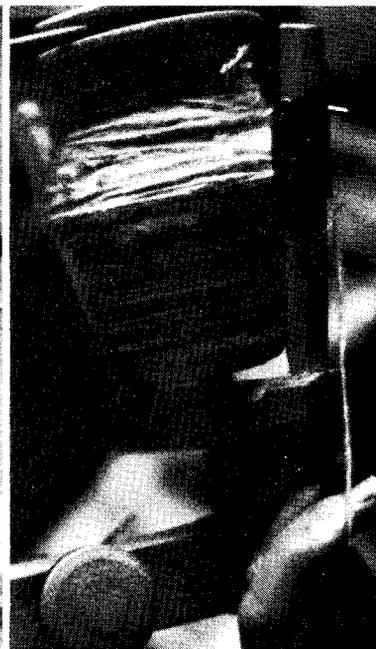
糸糸では、セーターや手袋、くつ下を編む。ヘルガは、手編みの洋服を学校に着て行くのを楽しみにしている。「お友達はみんなうらやましがって、家に帰って私と同じように糸糸を編んでます。」カンドラー姉妹は、友達から教わって2、3年前から糸車を回すようになったのだが、その彼女がこう話してくれた。

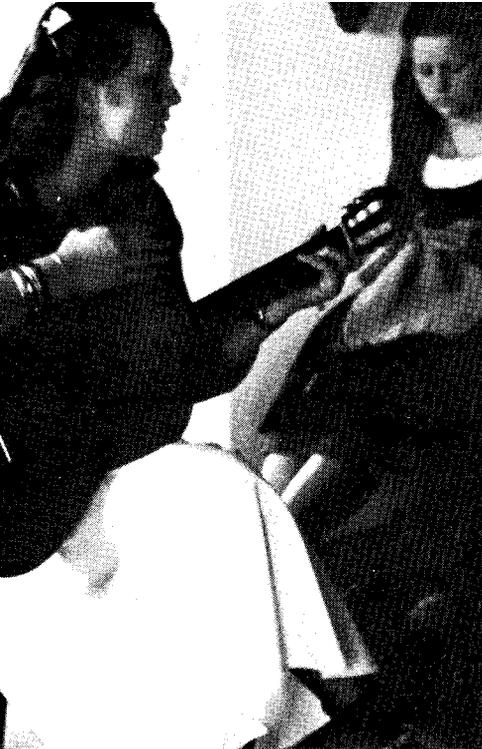
「オーストリアでは最近手編みの服を着る人がとても増えています。同じものをお店で買うと、びっくりするほど高いからです。」(たとえば、市販の手編みのセーターは1枚約2000シリング(約3万円)するが、カンドラー兄弟が山から仕入れてくる羊毛は、1キロ500

糸糸で自分の衣服を編んでいる少女

ドイツ南部の民族衣装

糸紡ぎをしている時





ギターを弾くヘルガ



糸紡ぎを楽しむカンドラー一家の人々

シリングほどである。しかも、カンドラー一家は純粋な天然の羊毛から毛糸を紡いでいる。(染色加工をしていない羊毛にはラノリンが着いており、防水性と絶縁性がある)その上、自分たちが編んだ衣服ということで、カンドラー家の大切な思い出の品となり、お金で買うことのできない貴重なものとなっている。

ヘルガは、カンドラー一家のそうした才能が、今出席しているドイツのミュンヘンステーク部ザルツブルグ(オーストリア)ワード部やその他の場所で友達を作ったり、フェローシップするのに役立っていると話してくれた。ほとんどの毛糸を紡いでしまう冬の間に、ドイツやオーストリアから教会員の家族が集って糸を紡ぐ技術を学び、楽しいひとときを過ごすのである。(ユーゲンドルフは、ザルツブルグの近くにある町で、ドイツ国境から約30キロのところにある)「大勢の人々が新しい技

術を習得し、暇な時間をもっと価値ある目的のために過ごす方法を覚えて帰って行きます」とヘルガは言う。そのほかカンドラー姉妹は、娘たちの手を借りて扶助協会のホームメイキングのレッスンで紡ぎ方の講習を行なうことになっている。

カンドラー一家は、常に自給自足の生活を目指していた。糸車と毛糸を備えることも、彼らの一年分の家庭貯蔵に含まれていた。ルースはこのように言っている。「緊急時でも、私たちは洋服を作ることができます。それも私たちの家族の備えのひとつに入っているからです。」また彼らは自分たちの手で小麦を栽培し、粉をひいてパンを焼く。そして、家庭菜園を造りなさいというキンボール大管長の勧告にも喜んで従っている。彼らが食べるものは大体、自分たちで作ったものである。「夏は畑で働き、冬は毛糸を紡ぐの」とペトラは

言う。

カンドラー一家は、ユーゲンドルフの最初のモルモンである。つい一年ほど前教会に入った親友のヘルマン・マルチノスは、カンドラー一家が味わった苦難を次のように説明してくれた。「カンドラー兄弟は、屋根職と鉛管工をしていました。しかし、彼が教会へ入ったことが町中に知れ渡ると、彼の下で働いていた職人たちは次々に仕事を辞めていきました。そして、町の大聖堂の屋根をふきかえる仕事も取り消されてしまいました。しかし、ステーキ部の祝福師は、『何も心配することはありません。あなたは勇気のある人なのできっと神様が祝福を与えて下さいます』と言って彼を慰めてくれました。それでも彼は、町から締め出され、ユーゲンドルフでは働くことができなくなってしまいました。しかし今では、隣の村々やザルツブルグからたくさんの仕事が入ってくるようになり、何の心配もありません。」

モルモンになることによって、子供たちにも一時被害が及んだこともあった。「私はカトリックの高等学校に通っていました。でも私たちがモルモン教会のバプテスマを受けたことが知れると、翌年から学校に行くこともできなくなってしまったのです」とヘルガは語った。すでに学校の登録を終え授業料も一部納めていたルースは、入学を拒否された上にお金も返してもらえなかった。ヘルガはこう言っている。「でも、ワード部の会員が助けて下さり、少なくとも彼らだけは私たちの友達だという確信を持つことができました。父の仕事が見つかったのも教会員の助けがあったからです。新しい学校を紹介してくれたり、とにかくいつも思いやりを示して下さいました。」それでもカンドラー一家の人々はこう言っている。「村人たちが皆、私たちに対して冷たかったわけではありません。ただ私たちのことをわかってもらえなかったのです。」さらにカンドラー兄弟もこう言っている。「村人たちは、私たちが神の教えから離れていくと思っ

たのです。しかし、今では私たちのことがわかり、私たちが前にも増して神に近づいていることを理解してくれました。」

間もなく、家庭にいつもの平安が訪れ、娘たちも新しい学校に通うようになった。

現在、カンドラー一家は広い裏庭のある、商店の二階のアパートに住んでいる。

「教会は、私のすべてです。この教会は真実であり、私たちが戒めに従うならば、天のお父様が私たちを守って下さることを知っています」とヘルガは証する。さらに伝道に出ている友達をたたえてこう述べている。「伝道中も、また伝道を終えて帰ってきてからも、彼らはオーストリアの教会の大きな力です。」

ルースは、ワード部の青少年と親しく交わることができるので喜んでいる。「彼らは皆信頼できる友達です。何も特別なことをする必要はありません。今のままの私をそのまま受け入れてくれます。他の支部の青少年たちとも友達になっています。私たちはよく、ザルツブルグと一緒に出かけに行って、城塞を回ったり、公園を歩いたり、市場で買い物をしたりします。」

毛糸を紡ぐことによって、カンドラー一家の人々は1世紀も前にこの国に浸透していた伝統を再び復活させようとしている。当時、女性は皆、結婚祝いに糸車を送られ、自分の手で作った洋服を身に着けていた。ペトラはこう語っている。「紡ぐことを知っているとしても役に立ちます。お友達や、そして将来は私の子供にも伝えていって、大切に残していきたいのです。」

共に働き、共にひざまずいて祈り、この回復されたイエス・キリストの福音が真実であることを証するカンドラー一家の姿を見れば、「これは確かに役に立ちます。お友達や、そして将来は私の子供にも伝えていって、大切に残していきたいのです」という言葉が、そのまま彼らの教会に対する信仰にも生きていくことがよくわかるであろう。

**聞**き手の胸を打つということは、良い話の必要条件である。たとえあなたの話が忘れられても、話を聞いた時の気持ち、メッセージを伝えた時のみたまはいつまでも忘れることができない。日曜学校で霊的な話をする時、あるいはいろいろな所で話をする時、ほぼどのような場にも当てはまる、話の基本原則がある。

聞き手を感動させ、動機づける話には、共通して5つの事柄があげられる。(1) 聞き手の注意を引く。(2) 物語、体験、興味ある事実などが盛り込まれている。(3) 目的が明らかにされている。(4) みたまの導きによって

準備し、話す。(5) 結論をはっきり述べる。

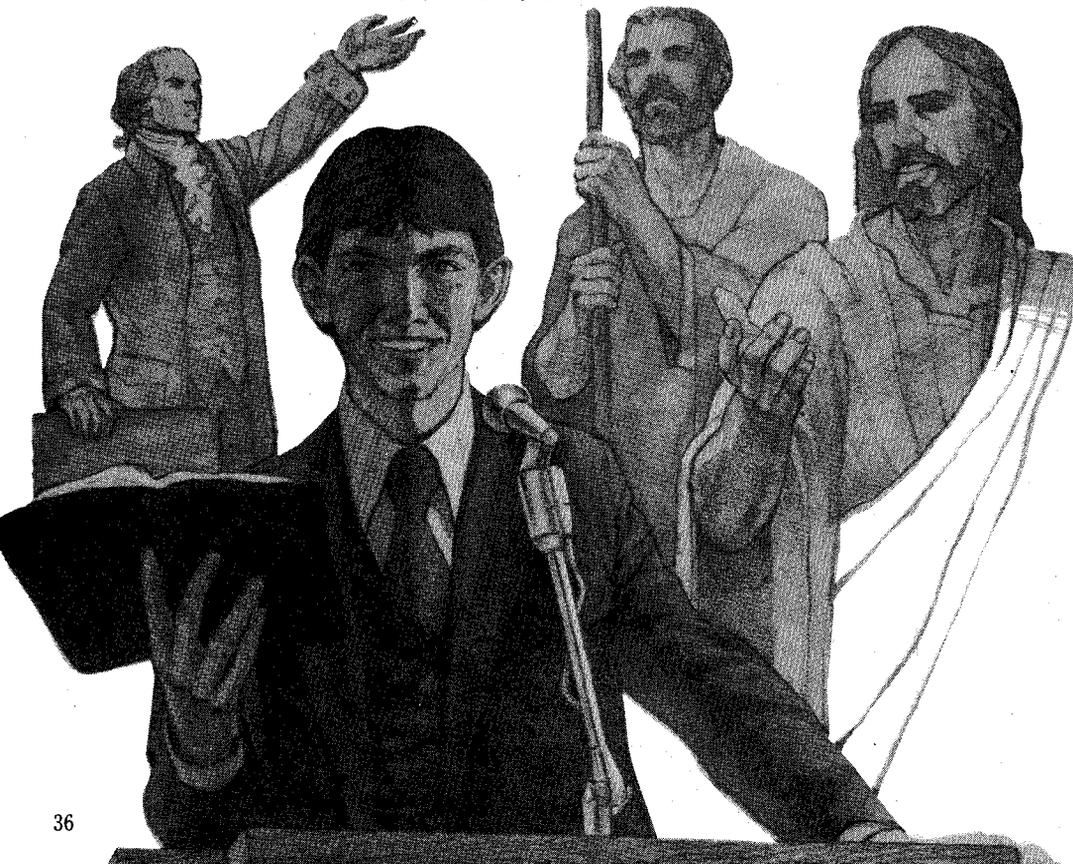
#### 聞き手の注意を引く

導入の第一段階は、聞き手の把握である。例えば、ブルース・バートンは「*The Man Nobody Knows* (だれも知らない人)」の中で、パウロがアレオパゴスの評議所で知られない神に捧げられた祭壇を拜んでいる人たちに会った話を、小説風にアレンジしてこう書いている。

アテネの住人と言え、賢く、冗談を言い、当時の流行を創り出す人々であった。彼らは何百という宗教を持ち、様々な神を信じてい

## 心を動かす話

エリック・スチープン、共著  
ゲイル・S・グローバー



て、もうこれ以上はいらなと思ってた。したがって宣教師と言えば、特に歓迎できない人たちであり、パウロもそのことは十分に知っていた。パウロはどうやって話を切り出したらいかがかと考えた。こう言ったらどうだろうか。「お早う、紳士諸君。これから新しい宗教をご説明したいので、少しばかり皆さんの時間を拝借したい。」これも恐らく人人の笑い者になるのが落ちであろう。新しい宗教といったところで、彼らには何の関心も湧いてこないであろう。

しかし、パウロは群衆の心をよくつかんでいた。彼が言ったことを要約してみると、こうである。「アテネの皆さん、この町の大通りを歩いていて気づいたことだが、皆さんは大抵の神や女神に祭壇を立て、その上に知られない神にもつと祭壇を立てている。諸君、そこで非常に興味ある巡り合わせでも言おうか、皆さんが知らずに拝んでいるその神こそ、私の言わんとする神である。」(ブルース・バートン、*The Man Nobody Knows* 「だれも知らない人」グロセット・アンド・ダンロップ、pp. 102—3)

群衆はもっと聞きたくなくなった。パウロは人々の心を捕え、そして自分の言わんとすることを人々に伝えることができた。彼は、上手な導入をするには聞き手のこと、つまり聴衆の関心や信念や年齢などを知り、それからおもしろくて適切な話を選んで始めなければならないことをよく知っていたのである。

### 関心を持続させる

聴衆の関心をつかんだら、それを持続させることである。普通は物語や事例、事実や考えなどを上手に計画して使うようにするとよい。人類最大の教師といわれる御方は、一般的で抽象的な概念ではなく、むしろ単純な物語やたとえ話によって周囲の人々の生き方を変えてこられた。

「その日、イエスは……海べにすわっておられた。

ところが、大ぜいの群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわれ、群衆

はみな岸に立っていた。

イエスは譬で多くの事を語り……

……譬によらないでは何事も彼らに語られなかった。」(マタイ13: 1—3, 34)

イエスが語られると、漁師や農夫、妻、娘、息子たちなど大勢の人々が聞きにやってきた。

イエスは話し始めた。「種まきが種をまきに出て行った。まいていうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。」(マタイ13: 3, 4)

イエスはいつも聞き手がよくわかることについて話をされる。ほとんどの人は種まきをして、そのすぐ後にカラスのおかげでせっかくの働きをふいにした経験を持っていると思う。「『この先生は自分たちの苦勞を知っておられるようだ。それでは、話を聞いてみようか』と、人々は考えたのである。」(バートン「だれも知らない人」p. 107)

要点を聞き手に覚えてもらうには物語や詩が有効である。例えば、「大志」について話す場合には、次のような説明を加えてみるとよい。

トミーという名の少年が客に自分の描いた絵を見せていた。鳥、犬、自動車、家などが描かれていた。しかし、どれも一番よい絵ではないとトミーは言った。そこで客が尋ねた。「それじゃ、一番上手に描けた絵を見せてくれないかな。」トミーはこう返事をした。「ばく、それ、まだ描いていないの。」(ボーン・J・フェザーストーン、*Of Mind and Muscle* 「知力と筋力と」p. 109)

良い話は、聖典の中や学校、家庭で読む本の中にふんだんにある。自分の体験や祖父母の昔話や日記などからの引用も、話に温かみを添え、話をわかりやすくしてくれる。自分自身の福音に関する証を述べることによって、聞く人だけでなく、自分の証も強めることができる。

### 目的に則した話をする

そうかと言って、主題と関係のない話をしてはならない。ただおもしろいとか、笑わせられるからというだけでは聞き手を混乱させ

るだけである。話には、目的が必要であり、話の中で述べることはすべてこの目的と直結したものでなければならない。時折、私たちは伝えたい考えや思いがあまりにも多くあって、結局何も関連性のない話をあれこれと述べてしまうことがある。こうした話も時には効果があることもあるが、関係のない話が多いともなると、その効果はなくなってしまふ。そうすると、次のようなことが起こってくる。

ひとりの農夫が講演者の話を聞きに公会堂へ入ってきた。ところがあまり話が長いので、少し新鮮な空気を吸おうと外をぶらついていった。近所の人が通りがかって尋ねた。「ジム、何の講演なんだい。」

「さあね。まだ大したことは何も言っていないよだけど。」

話は十分な時間をとって、前もって準備し、自分が言うことをよく組み立て、しかも新しい興味ある情報が入るようにする。そのためにも自分の経験を日記に記すようにするとよい。そうしておけば、いろいろな話をする準備にもなり、話すことが自分にとっても楽しく興味あるものとなるに違いない。

#### みたまによって話す

ハロルド・B・リー大管長は、ある大会でこう述べた。「自分自身の中に燃えるものがない限り、人の霊に火をつけることはできない。」(Sentence Sermons 「一文説教集」ディーン・ツンマーマン編, p. 128) これは確かに、話し手が覚えておかなければならない最も基本的な助言である。話をする時は、自分の言っていることを信じ、主のみたまを得るようにする必要がある。自分が話している原則を守っているのはもちろんのこと、祈りとふさわしい準備をすることが大切である。皆さんは生来の能弁家のように力強い話をする必要はない。天父の助けを得て準備をすれば、話す時にも主が助けて下さる。

#### 時間内に終わる

最後に、考えておくべきことは、いつどの

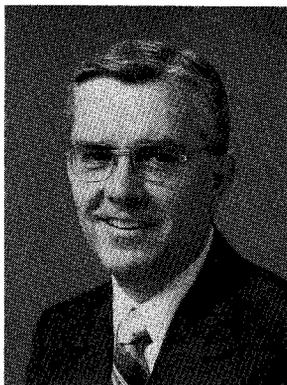
ようにして話を締めくくるということである。聞き手を疲れさせないでさわやかな印象を残すためにも、最後の話はきちんと時間内におさめるべきである。皆さんは話し手が「それでは最後に……」と二度三度と繰り返しながら、それから5分も10分も話し続けるのを聞いたことはないだろうか。同じようにいらいらしてくるのは、要点を話し終えたあとでまただらだらと話をすることである。マーク・トウェインは次のように書いている。

「何年前に、コネチカット州のハートフォードで、うだるように暑い夜に、ホーリー氏の年次報告を聞きにみんなで教会に出かけた。ホーリー氏は、援助が必要なのに申し出を遠慮している人たちを自分の足で捜して回っている町の宣教師である。彼は貧民街の生活を話し、貧しい人々の勇気と信仰心を例にあげて説明した。『大金持ちが大金を寄付すると語り草になる。しかしそれは間違っていると思います。貧者の一燈の方がもっと大切ではないでしょうか。』

私はホーリー氏の話聞いて本当に感激した。話が終わるのが待ちきれないほどだった。ポケットに400ドル持っていたのだが、人から借りてでももっと寄付したい気持ちだった。みんなの目にもそうした思いが読みとれた。しかし、ホーリー氏は一向に献金袋をまわす様子もない。ただ話続けるばかりだ。話が長びくにつれて暑さはこうじ、眠気もひどくなってきた。私たちの熱意はしだいに冷め、一時は100ドルも、と思っていたのに、最後に袋がまわってきた時は、そこから10セントを失敬した程である。』(『Thesaurus of Anecdotes』「逸話事典」エドモンド・フラー編, pp. 58—59) 話は聞き手の興味が失われる前に終わることである。

話はわかりやすく、目的に則したもので、しかも明確に述べるべきである。そうすれば、あなたが述べた考えは聞く人々の生活を豊かにし、あなたは人の心を動かす雄弁な話によって主と隣人に奉仕する喜びを味わうことであろう。

# 1988年の指導者であるあなた



七十人第一定員会会員  
M・ラッセル・バラード・ジュニア

1978年5月16日のブリガム・ヤング大学に  
おける講演より抜粋

**私**は、皆さんが将来目にするであろう最も感動的な光景、すなわち今から10年後の教会の姿について私の考えていることをお話したいと思う。1978年の自分のビジョンを掲げて、1988年には教会がどのようになっているかを考えてみていただきたい。しかしここで決して忘れてはならないことがある。それは、この地上に回復されたイエス・キリストの輝ける福音の中であって、あなたが自分の正しい役割を担うことができるようにどれだけ備えるかということが、1988年の教会を大いに左右するということである。

教会は、最初に100のステーク部が出来るまで、1830年から1928年の98年間かかり、次の100のステーク部が出来るまで、24年間（1928年—1952年）かかった。ところが、1960年までに300のステーク部が組織され、1964年には400になり、1970年には500になった。そして1973年には600、1975年には700のステーク部が組織された。1977年にはステーク部数は800を数え、1978年3月19日には900番目のステーク部が組織された。（1979年2月18日には1000の大台に達した。）

教会が1年に100のステーク部を作ること

を想像して見ていただきたい。すでにあげた数字からもわかるように、その速さはますます増してゆくであろう。私の計算では、1988年にはおよそ2500のステーキ部が誕生していると思う。そこで考えていただきたい。1988年における2500人のステーキ部長は今どこにいるのであろうか。第1副ステーキ部長、第2副ステーキ部長、幹部書記や書記は、現在どこにいるのであろうか。また、30,000人の高等評議員はどこにいるのであろうか。さらに各ステーキ部に平均で10のユニットがあるとすると、これが現在の平均だが、25,000人の監督、第1副監督、第2副監督、幹部書記、書記、長老定員会会長、副会長、七十人定員会会長、大祭司グループリーダー、そしてその補助、扶助協会会長、副会長、初等協会会長、副会長などは、今どこにいるのであろうか。それは皆さん方一人一人である。そこで皆さん自身に問いかけていただきたいことがある。皆さんは、主が1988年になった時に皆さんに期待しておられる役割を担う用意があるだろうか。

皆さん方の大半は19歳から25歳までの年齢であると思われるが、兄弟の皆さんは30代前半のステーキ部長が教会にどれだけの御存じであらうか。教会を管理している20代の監督がどれほどいるかお分かりだろうか。その数は想像を絶するほどである。

天父とその永遠の計画から見た場合、皆さんの生得権は特別なものであると思う。皆さん方の生得権、そして皆さん方が末日聖徒イエス・キリスト教会の教会員であることの特権と権利は、非常に神聖である。それは決して偶然に得られたものではない。皆さんはこの世に生まれる前に、天父と何か大切な約束を交わしているのである。

私たちは皆、自分の生活を内面から深く反

省してみる必要がある。自分は、天父が用意しておられる祝福や約束にふさわしい生活をしているだろうか。もっと改善できる点はないだろうか。私たちの進歩の妨げとなっている罪、洗い清める必要のある罪はないだろうか。私たちは天父が私たちに用意しておられる召しを果すために、最善を尽くしているだろうか。

ちょうど3週間前、私は単身でステーキ部長会の再組織に出かけた。まさに私と主と地区代表だけである。ステーキ部の全神権指導者を面接し、主のみこころにかなう人を決めるのは大変なことである。私は断食をし、祈って主の導きを求めた。すると実に興味深いことが起こった。私たちが神権指導者を全員面接していた時、ひとりの男性が入ってきた。私は彼に以前から知っているような親しみを感じた。私は立ち上がって握手をすると、こう言った。「どこかでお会したことがあるようですが、どこだったでしょうか。」彼は答えた。「バラード兄弟、一度だけお会いしたことがあります。それも11カ月前にほんの2、3分お目にかかっただけです。」そして彼がドア

---

この地上に回復されたイエス・キリストの輝ける福音の中にあつて、あなたが自分の正しい役割を担うことができるようにどれだけ備えるかということが1988年の教会を大いに左右する。

---

を出て行こうとした時、主は彼こそステークス部長になる人であると私に示して下さった。私はこのことを心から皆さんに証したい。私は日曜日の午前の大会で彼の召しの支持をとり、その席で彼に証を頼んだ。すると彼は、自分の父親は隣のステークス部の祝福師で、母親はそのステークス部の扶助協会会長である。しかし、彼は私の許可を得て、両親に話をしてもらいたいと言った。

彼の母親は、「いいえ、そんな。あなたがステークス部長に召されたのですから」と尻ごみした。

すると彼は「それをどうして知りましたか」と尋ねた。

母親はこう答えた。「ちょうど12時半だったと思います。台所にいたのですが、みたまの力で、息子がステークス部長に今召されたとわかりました。主人も、お店に買物に行っていたのですが、家に帰ると台所に入ってきて、『ママ、どうも息子がステークス部長に召されたという気持ちが出てならないのだが』と言うのです。」

ステークス部長は、どのようにしてだれが監督になるべきかを知るのでしょうか。教会幹部は、だれがステークス部長になるかをどのようにして知るのだろうか。大管長はだれが教会幹部になるかをどのようにして知るのだろうか。私はこう思う。それは啓示によると、皆さんもそれを信じておられることと思う。主は現在の皆さんをよく知っておられるはずである。今伝道地に向かっている宣教師の皆さんは、伝道中に自分が信頼できる者であること、頼りになること、献身的であること、熱心であることを主に示さない日が一日もないようにしていただきたい。主は現在の教会の青年男女をよく御存じだからである。主は皆

さんの毎日をよく知っておられる。そのようにして皆さん方一人一人をじっと見守りながら、皆さんが自分の奉仕と力によって自分の決めた優先順位を実生活の中でも生かし、その忠実さを示した後に、高等評議員、初等協会会長、扶助協会会長、監督、ステークス部長などの必要が生じた時には、主が責任ある神権指導者に、あなたはこの世に生まれて来る前に交わした約束にふさわしい生活をしているし、十分その備えができてしていると告げられるに違いないのである。

皆さんが世の救い主と密接な関係を築くように心からお勧めしたい。皆さんが主のみことと一致していることを知る以上に大切なことはないと思う。それは必ずしも容易ではないかもしれない。生活の大半を費やし、しかも断食や力ある祈りが必要である。熱心にもかかわらず責任感のある奉仕の業を行ない、努めて善き業に従う明るい心が必要である。

祈る時は、だれに祈っているかということを考えていただきたい。宣教師や自分の子供たち、他の人々の祈りを聞いていると、時々自分たちがいったいだれに話をしているのかはっきり認識していないと感ずることがある。

皆さんにひとつの経験についてお話ししたいと思います。私は七十人第一定員会に召されてすぐ、カナダの自分の伝道部に戻った。その翌月、私たちは東部カナダで全神権指導者を集めて聖会を開いた。大管長と十二使徒と1名の十二使徒補助が出席されていた。とても素晴らしい経験であった。私はこの地域の管理神権者であったので司会役を務めた。

聖会が終わると、私は、大管長の方々を宿泊していたホテルまで車で送った。教会幹部の方々は私にお休みの挨拶をして各自の部屋に行かれた。するとキンボール大管長の秘書がホテルのカウンターの所で手間取って

る様子だったので、私は彼のところに行って、大管長に部屋の鍵をお届けしようかと申し出た。私は鍵を受け取ってエレベーターで9階まで上り、ホールへ行った。するとタナー副管長とキンボール大管長がおられたので、私は「大管長、鍵をお持ちしました」と言った。

キンボール大管長はいつもながらの心の込もった様子で礼を述べられた。するとタナー副管長が私の腕を取ってこう言われた。「ラス、どうですか。中で一緒に祈りませんか。」大管長会の方々と一緒に夕べの祈りをするなど、皆さん想像できるだろうか。思いもよらないことだが、とにかく私はキンボール大管長と共にタナー副管長の部屋に入った。するとすぐにロムニー副管長と他の教会幹部の方も入って来た。私は天にも昇る気持ちであった。部屋のベッドのまわりにひざまずくと、目に涙があふれてきた。

私はタナー副管長の隣にひざまずいていた。彼は私の様子を感じ取ったようで「大管長、あなたにお祈りいただきたいと存じます」と言われた。それから、私は予言者の祈りを聞いた。私はその祈りを通して大きな教訓を得た。これまで感じたことのないみたまを感じたのである。予言者が神と語る時、それは親友に語っているようである。

大管長はごく短い祈りの中で、このようなことを言われた。「そして、天父よ、私共はとりわけ、きょうの私たちの働きを受け入れて下さるようにお祈り申し上げます。」この言葉は、祈りの原則についてほかの何よりも私の心を貫いた。私たち一人一人が、その日の働きが主に受け入れられたものであるようにと願って一日を終わることができるならば、どんなに素晴らしいことであろうか。そこには大きな力がある。主が私たちの父であり、私

たちが主の息子、娘であり、主のわざに働く僕であることを知ることは、非常に大きな力である。願わくは、私たちの働きが常に主に受け入れられるものであるように祈っている。

私はここ11カ月の間、この偉大な教会の力と重大さを痛切に感じてきた。韓国、フィリピン、グアム、香港、イギリス、合衆国全土そして、カナダの一部を旅行し、今皆さんにお伝えしたい私の証は、主が心の正直な人々の救いを急速に推進しておられるということである。私の知っている限り、神権指導者が祈りをもって主の導きを求め、献身的にしかも決意を持って実行する度合に応じて教会は発展するのである。

私はこれまで大勢の人たちを面接してきたが、最近伝道に出たいというひとりの青年を面接した。私は彼に非常に大切なひとつの質問をした。きょうここにおられる皆さん方一人一人に、特に宣教師の皆さんにお尋ねしたいと思う。「あなたは今までにモルモン経を初めから終わりまで読み通したことがありますか。その内容についてよく考え、祈ったことがありますか。あなたは、モルモン経が真実だと知っていますか。」

皆さんは伝道に出、実社会に出た時に、様々な風被打たれ、絶えず試しに遭う。私たちがこの世に送られてきた<sup>ゆえん</sup>所以はそこにある。そして私たちが真実どれだけ献身的に福音に打ち込むことができるかを見られるのである。従って試しはやって来る。お気づきのことと思うが、伝道を終えた人々の中にも、いまだに試されている人がいる。こうした試しに打ち勝つことは決して容易なことではない。しかし、もしあなたが、ジョセフ・スミスは神の予言者であり、ジョセフ・スミスは森で永遠の父なる神と御子イエス・キリストの姿を仰ぎ見たいとの確固たる証を持ち、それを基

とした生活をするならば、そしてジョセフ・スミスが神の力と賜とによってモルモン経を翻訳したことの証を自分で持つならば、何も恐れることはない。備えも十分にできるであろう。しかしその責任をまだ果たしていないならば、今すぐその備えをするようにと申し上げておきたい。

どうか私のチャレンジを受け入れて、モルモン経を読み、それについて調べ、考えていただきたい。そして予言者ジョセフ・スミスの使命や主イエス・キリストの使命、そしてモルモン経が神聖な書物であることについて自分の確固たる証を培っていただきたいと思う。もしあなたがこのモルモン経を読み、考え、そして証を持つならば、1988年あるいはもっと早い時期に、主があなたを管理する神権指導者を通じて、「長老定員会の会長が必要です。この召しをぜひ果たして下さい。扶助協会の会長が必要です。どうかこの召しを受けて下さい」と言われる時に、あなたはその用意ができていないはずである。

私が1988年に描いているように教会が発展し、拡張した時に、この場におられる大勢の方々方がステーク部長会、監督会、高等評議員会、あるいはその他のステーク部の指導者として活躍しているとしても何ら不思議ではないのである。いや、この場に在る人々の中からはひとりあるいは数人の方が教会の中央管理会や評議会で働くこともあるかもしれない。皆さんがその用意さえしておけば、召しは来るのである。

今、私は初めて主がこの末日のために優れた霊の息子、娘をとっておかれたと予言者たちが語ったわけがわかったような気がする。皆さんが今まで留め置かれていたのは、主は今、皆さんを必要とされているからである。王国の建設のために、皆さんを今必要として

おられるのである。この1978年における主の王国は皆さんが神の王国を導く責任を引き受けられるようどれだけ備えるかに直接比例して、1988年の新しい目標に向かって発展し、成長してゆくのである。そして私たちが久しく待ち望んでいるその日、すなわち世の救い主が「それでよし」と言って、王の王としてこの地上の王国を統治される日のために、備えなければならないのである。

神が皆さん一人一人を祝福されるように祈っている。皆さん方一人一人は教会にとってかけがえのない方々である。私たち教会幹部は教会の若人が非常に誠実であることを喜んでいる。ステーク部のどこへ行っても皆さん方のような若人を目にする事ができる。私にとってこれほど大きな励みはない。私たちはここでもかなりの成果をあげている。しかし、この席をかりて心からあらん限りの力を尽くして皆さんにお願いしたいことは、もしも皆さんの生活で正すべきことがあるならば、きょうさっそく監督に話していただきたいということである。また、もっと確固たる決意をする必要があるならば、それをきょうの日記に書き留めていただきたい。より良い人間になるために何をなすべきかを決め、こう決意していただきたい。「天父よ、私は霊的にも、肉体的にも、そして情緒的にも、あらゆる点で準備をします。この地上にあなたの王国を建設するために、あなたが命じられることが、たとえどのようなことであろうと。」

願わくは、皆さんがすべてはよしという証を持ち、心に平安を得ることができるようになる。イエス・キリストの聖なるみ名により、お話し上げる。アーメン。



# 什分の一の律法

日本横浜ステーキ部長

浅間 玄也

神は創世のはじめより、神の王国において救いと昇栄を得る真の道の人々に教えられた。

それは人々の過ちの故に必ずしもいつも理解されたわけではなかったし、いつも説かれたわけでもなかったが、初めから同じ福音があった。

その福音の教えの中にきわめて大切な主の律法、什分の一の律法がある。

アブラハムの時代にサレムの王メルケゼデクという人がいたが、「彼はアブラハムを祝福して言った。

『願わくは天地の主なるいと高き神が、アブラハムを祝福されるように。』

アブラハムは彼にすべての物の什分の一を贈った。」(創世記14: 19-20)

また、主はシナイ山において、イスラエルの人々に次の戒めを与えられた。

「地の什分の一は地の産物であれ、木の実であれ、すべて主のものであって、主に聖なるものである。」(レビ記 27: 30)

また什分の一とは何かという祈りに答えて、主は言われた。「毎年彼らの得る全利益の什分の一を納むべし。これを以て、わが聖なる神権のためにする彼らの守るべき永久的定法となす。」(教義と聖約119: 4)

主はこの末日に、ふたつの大きな目的をもって、什分の一の律法を主の教会にお与えになったと思われる。

1. 教会の財政を運営する上で最も公平な方法であって、各人の収入に応じて負担をすればよい。未亡人が少額を支払うのも、富める人が大金を支払うのも等しいのである。
2. 人々の信仰と什分の一の律法に対する従順を試すことである。什分の一の律法に従うことは約束の祝福を伴う。

これは主が人々に与える祝福の律法となる。(リグランド・リチャーズ「奇しきみわざ」)  
マラキ書の中にはこの律法を守る者に与えられる偉大な約束が記されている。

『人は神のものを盗むことをするだろうか。

しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまだ『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。什分の一と、ささげ物をもってである。

あなたがたは、のろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである。

わたしの宮に食物のあるように、什分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。

これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」(マラキ3: 8-10)

什分の一の律法は祝福であり、私たちの信仰を測る物差しでもある。

この律法は自由意志による献金を通じて、人人の福祉に貢献し、主の業を広め、教会員が利己心を捨て、主の前に従順となるために役立つものである。

さらに霊的な組織であると同時にこの世の組織でもある主の教会を確立させ、この地上に主の王国を建設する実際的な方法でもある。もし人が心に平和と満足と喜びを感じる価値ある人生を望むなら、主の律法に耳を傾ける必要がある。

従順にこの律法を守れば、主は天の窓を開いて私たちに溢れるばかりに恵みを注いで下さると約束して下さっている。

ジョージ・アルバート・スミス大管長は言われる。

「私達は地主ではない。地上のどの地、またそこから得る富も、私達のものではない。

ただ一時的に借りているだけである。

死ぬ時にはすべてを残していく。

私達は生まれる時も、この世を去る時も裸一貫である。

地球は主のものであり、主の戒めを守るといふ賃借料を払ってこそ、祝福を得、この世であっても来るべき世であっても喜びを得ることができるのである。」

## 什分の一を捧げることに よって得られた神の祝福



松本支部

百瀬 梅代

太平洋戦争が終わって8年目の3月、私はふたりの娘を連れて東筑洗馬村から松本に引っ越してきました。最初は右も左もわからないことばかりでしたが、移って2年目に隣の奥さんの口利きで、私は宣教師のメイドとなりました。昭和30年の6月15日のことでした。それ以後私の人生は大きく変わったのです。その頃の松本支部は非常に小さく、ふたりの宣教師が熱心に伝道していましたが、なかなか改宗がありませんでした。私の仕事は若いふたりの外人宣教師の夕食を作ることでした。しかし生まれて初めて人に使われる身となってみて、自分が悲しくもあわれで泣きたいほどでした。何度かやめようと思いましたが、その度に彼らの見るからに清潔で質素で、しかもやわらかい心の奥底から出てくる温かいものに引かれてついに10日過ぎ、15日が過ぎてしまいました。そのうち神様についてお話するようになり7月の半ば、家庭集会を受けるようになりました。8月10日に先輩宣教師が北海道へ転任することになりました。その時、彼は「この中には真理が書かれています。これを一生懸命勉強して下さい」と言って、私にモルモン経を下さいました。私は今もその緑の表紙の部厚い本を大切に持っています。まだ若いその宣教師の顔もはっきりおぼえています。この人に逢わなかったなら、今の私は無かったかも知れないからです。

続いて転任してきた宣教師とも2回ほど家庭集会を行ないましたが、お互いに意見が合

わなくて中断してしまいました。私は大変勝気な女でしたし、「家庭集会なんかやってくれなくても自分ひとりで勉強するから」とひとり息巻いていました。そしてひとりでモルモン経を開いて見るのですが、いっこうにわかりません。そんな時に、ある姉妹と宣教師が什分の一について話しているのを聞きました。早速、そのことがモルモン経の第3ニーファイ24：8—10に書かれていることを教えていただき、そこを読みました。読んでも深い意味はわかりませんでしたが、とにかく自分の収入の十分の一を神様に返せばいいのだと思いました。9月30日、私は300円を宣教師に什分の一ですと渡しました。夕食を作ったり、洗濯や掃除をして宣教師から頂いていた手当が3000円だったからです。その時の宣教師の驚きようときたら、ありませんでした。それもそのはずです。私は教会員でもなく、まして家庭集会もお断わりした様な駄目な人間だったからです。宣教師は再びレッスンを申し出ましたが、私はかたくなにお断りしてきました。それでも12月頃から再び家庭集会を始めていただき、翌年の3月10日に娘と一緒にバプテスマを受けました。

メイドをしながら編物で生計を立てていた私たち母子3人の暮らしは、決して楽ではありませんでした。足りない、足りないで過ごす毎日でした。什分の一を納めればあとのようになしてお米を買えばよいかと考える時も何度かありました。しかし不思議なもので、そん

な時でも、いつも何とかひもじい思いもせず  
に母子3人楽しい生活をしてきました。どのよ  
うな暮しをしようとも、明るく清く、のびのび  
と子供を育て、主の前に義しい者になってほ  
しいといつも願っていました。

当時、私たちは母子寮に住んでいましたの  
で、子供たちが成長してくると、どうしても  
引越さなければならなくなりました。私は、  
思いあまってどんな狭い所でもいいから母子  
が安心して住める住居を下さいと神様に祈り  
ました。でも、そんな大それたことを神様は  
聞き届けて下さるはずはないと思ながらも、  
祈り続けました。メイドになってちょうど4  
年目の6月15日、突然、「百瀬姉妹、今度本部  
(伝道)のスケジュールが変わり、メイドを  
やめることになりましたので、7月中にほか  
の仕事を見つけて下さいませんか。私たちも  
捜しますので」と困ったお顔をして言われま  
した。私も非常に驚きましたが、そういうこ  
とならばしかたありませんと答えてみたもの  
の、今からこの歳で何の仕事につけるだろ  
うかと考えると、途方にくれてしまいました。  
ところがまた不思議なことに、考えもしな  
かった信州大学医学部の清掃婦の仕事が舞い  
込んで、断わることもできずに7月20日頃  
から働くようになりました。続いて10月から  
附属病院の用務員に採用されたのです。

ある時、庭の草刈りをしていて、安い土地の  
売物があるという話を友達から聞きました。  
その時も貧乏でしたし、お金は少しもありま  
せんでした。でもあちこちからお金をお借り  
して、一坪3,400円の土地を60坪ほど手に入  
れることができました。当時住宅公庫からお  
借りするのが何かと面倒ではあったのですが、  
それでも一回で許可があり、2年後にこの家  
を建てることができました。その時、これは  
私ひとりの力ではない、神様のお助けがあっ  
たからできたのだと、神様に感謝し、これか  
らは神様のために働かなければと決意はした  
ものの、大きな借金をした後でもあり私たち  
の生計はますます苦しくなりました。それで

も納めるべきものは納めなければなりません。  
什分の一を出すために職場旅行も、着る物を  
買うことも一切やめました。そして、この祝  
福のお返しにと一生懸命、教会のために働  
きました。そんなある日、私は宣教師に頼ま  
れて、ある求道者のところを訪れました。その  
時私の証をと言われ、別に取り立てて考  
えてもいなかった私の口を突いて出てきた証は次  
のような言葉でした。「神様に従順に、そして  
忠実であれば、必ず神様は祈りを聞き届けて  
下さいます。私はある時、どうしても家がほ  
しいと神様をお願いしました。すると神様は  
私に宣教師のメイドをやめさせ、信州大学の  
仕事を与えて下さり、住宅金融公庫のお金を  
借りる資格を作して下さいました。私の知ら  
ないところで、神は私のためにみこころをお  
使い下さり、私の祈りに応えて下さいました。  
こんな私でもこれほどの恵みを下さるので  
すから、だれでも一生懸命に努力すればき  
っとその行ないを神様は認めて下さり、必  
ず助けて下さるはずですよ。神様は生きて  
いらっしゃって、いつも私たち人間の行  
ないを見ているのですよ。」

まったく自分で証して自分で驚いてしま  
いました。「あ、ほんとうにそうだったのだ。  
私の知らない所で、神様は私のためにいろ  
ろとみこころをお使い下さったのだ。あ、申  
し訳ない。もっともっと一生懸命ご恩返しを  
しなければならぬ。この家は神様の家であり、  
ただ私が管理させて頂いているだけだから、  
この家をもっと神様のために使おう。宿の  
ない人や困っている人、問題のある人のた  
めに使っていたらどう。」私はそう考  
えるようになりました。そしてその夜涙な  
がらに感謝の祈りを神様に捧げたのです。  
今はふたりの娘も恵まれて、それぞれ立  
派な神権者に嫁ぎ幸せな生活を営んでい  
ます。

神様は確かに生きておられます。イエス  
が私たちの贖い主であることを心から証  
し、すべてをイエス・キリストのみ名によ  
って申し上げます。アーメン。

# まこと 真の教えに 改宗して



日本東北ステークス部  
越谷支部

森本 すい子

6月の若葉が雨上りに美しく映えている、ある日の夕方、見知らぬ二人の外人宣教師の訪問をうけました。私たち家族にとって、この日がモルモン教会の宣教師との最初の出会いです。

まず私の家族を紹介します。教員の主人と音大で声学を専攻している娘、それに障害児の施設に務めている私の3人です。

私たち夫婦は30年来のカトリック信者で、娘も生後間もなく洗礼を受けました。あまり熱心ではありませんが、カトリック教徒としてつつましく生活していました。

私は、宣教師たちにはっきりと、私たちがカトリック信者であり、いくら来ても無駄であると話しました。しかし主人は初めはちょっととまどったようでしたが、モルモン教についてはカトリックの神父の説教の中にも出ていたので興味があるらしく、今回の訪問を約束してしまいました。

そして二日後にモルモン教について詳しく話を聞きました。私は他の宗教の話を聞くのはカトリックの教えに背くと思ひ、来客などを理由にあまり同席しませんでした。三回目のレッスン後、ひとりの宣教師がアメリカに帰国するというのを聞き、もうこの家に宣教師は来なくなると思ひ、私は本当にホッと神に感謝の祈りを捧げたものでした。

ところが数日後思いがけなくも、たどたどしい日本語の宣教師が、今度転任してきた日本

語のすばらしく上手な宣教師を連れて挨拶に見えたのです。アメリカ人のベルナップ長老とカナダ人のスティード長老で、今思えばこの二人の宣教師によって我が家の宗教改革は始められたのでした。この日から宣教師たちの本格的な訪問が始まり、娘も同席するようになりました。主人は元来、勉強家で本を読むことが大好きなところへもってきて、夏休みにも入り、宣教師からお借りしたモルモン経を読んで深く感動している様子に、私はただ罪の怖ろしさを感じるばかりでした。

と申しますのも、私たちはカトリック教徒なので他の宗教の勉強することすら罪を犯すことになるからです。私は、あの宣教師たちはすばらしい人々だが、今度こそ上手に断わってほしいと主人に頼みました。しかし、日頃温和な主人の次の言葉を聞いて、私はびっくりして鳥肌がたっていました。

「今までカトリックの教理以外は何も知らなかったが、あのレッスンを受けモルモン経を読んでいると、モルモン教の教えが真の宗教のような気がする。カトリックは人が作った教会のようではない。本当の教えを知った以上考えなおす必要がある。あの宣教師たちをみても、自分の信じる宗教のために日本に来て不自由を忍びながら、その青春時代を神様のために捧げているではないか。モルモン経も読まず、レッスンも心を入れて聞かないから真理の教えがわからないのだ。」主人はこ

うははっきり言い切ったのです。

このような主人に対し、改宗を大罪と考えている私の気持ちはだんだんと主人から離れていきました。結婚して25年、心の離れたことは一度もなかったのに、このままでは家庭不和になることは目に見えています。私がモルモン教を理解するか、主人の心をカトリックに引き戻すか、随分と苦しみ祈りました。娘には、レッスンを受けるのはよいが、バプテスマは受けない方がよいと言っていました。

忘れもしない7月19日の夜、カトリックの教理には無い前世についてレッスンの日、途中で気分が悪くなり中座しました。日頃丈夫な私とその夜珍らしく高熱にうなされ、頭の中を駆けめぐるのはジョセフ・スミスのことばかり。私もどの宗派に属したらよいかうなされながら神に伺っていました。翌日は心配して見舞いに来てくれた宣教師を家の中に一歩も入れずに帰してしまう有様でした。

かつては、カトリックの修道院に入っていたこともあり、この地区のリーダーとして教会の発展のために力を尽くしてきただけに、その教えを捨てることなど到底出来ることではありません。また、50年間も飲み続けてきたお茶をやめる気持ちはさらさらありませんでした。

このようにかたくなな心の私を、宣教師たちや主人はどんなにか心を痛めて祈ってくれたことでしょう。この頃からあれ程好きだったコーヒーをやめて、いましめを守ろうとしている娘を見て、かたくなな私の心も少しずつ動いてきました。

8月の第一日曜日の前日、主人に、「兎に角このままでは苦しむばかりなので明日は断食をしてよく祈り、自分の心を見つめてみましょう。そしてこれから一か月間、「知恵の言葉を守って生活してみることにしましょう」と言いました。勿論主人は大賛成です。そして翌日初めてモルモン教会の門をくぐりました。カトリック教会には見られない会員たちの温かい態度に胸をうたれました。

しかしなぜかそこでは、いくら祈っても私の心は満たされず、むしろ苦しみが増した感じでした。それからは会員の方も数名、何回か訪問して下さり、かたくなな私の心を何とかほぐそうと努力して下さいました。主人と娘は改宗しても、私は絶対に改宗しないと自分自身に言い聞かせながらも、何故かやるせないむなしさが残るばかりでした。

八月も半ばを過ぎた頃から、宣教師たちが家に来ると、モルモン教の教えこそ真の教えらしいと思い、逆に彼らが一週間も来ないと、カトリックの方を守り通そうと思う不安定な日々が続きました。

この頃から、宣教師たちは聖霊の導きで私たちの所に来ているのではないかと思うようになり、いつの間にか、それまで毎日欠かさなかったカトリックの祈りを止めていました。

カトリックの教えはやはり人が作ったものかなあと感じるようになりました。たまたまタバナクルが日本に来ることを知り、何か心が満たされればと思い切符を手に入れました。

9月2日のレッスンの日、スティード長老からバプテスマを受ける日を聞かれても決心がつかず、何も答えませんでした。でも次の日の朝、モルモン教の教えを知って以来初めて神に、「バプテスマを受けたいのですがいつにしたらよいでしょうか」と心から祈ることのできた自分にびっくりしました。その日の夕食の後に、娘からバプテスマを受ける日の相談が切り出され、タバナクルの美しい祈りの歌声で心を洗われた今度の日曜日がいいということになりました。

早速、宣教師に電話しました。この日の来るのを待っていてくれた宣教師や主人の喜びは大変なものでした。その夜来てくれたスティード長老の神への感謝の祈りの言葉を私は一生忘れないことでしょう。

9月9日、私たち家族は改宗してスティード長老、ベルナップ長老よりバプテスマを施していただきました。そのバプテスマを受ける直前、遠い昔の学生時代、カトリック教理

の勉強を始めた頃から今日までのことが思い出され、天の王国に向かって今日から本当の道を歩き始めるのだと思うと、私の目からは涙が溢れ出てきてどうすることもできませんでした。

何のための涙かわかりません。しかし按手礼を受けた時には涙はかわき、胸が熱くなるのおぼえました。宣教師、兄弟姉妹、家族の者に対し心からありがとうを言うことができました。そして愛する天のお父様には口では言い表わせない感謝の祈りを捧げました。また今考えると、随分失礼な態度や言葉で接し、どんなにか心を傷つけたであろう宣教師たちに心の底から謝りました。

この日から、カトリック教会の友人に対して、自分の信仰をはっきり表明できる勇気が出てきました。親しいカトリックの友人を訪ね、改宗したことを胸を張って言えたのです。

友人は「貴女が改宗するのだからモルモン教はきつと素晴らしいのでしょう。私も一度宣教師に会ってみたい」と言ってくれました。カトリック教会の神父様とも電話をし、神父様が「あなたたち家族が改宗するとはとても信じられない。それもカトリックが最も嫌っているモルモン教とは——」と言った言葉が今でも耳に残っています。

これからの私は、天のお父様のために働き、今までの私のように天の王国への違った道を歩いている人たちに呼びかけて、私がこの世を去る日までに一人でも多くの人を正しい道に連れ戻したいと考えています。かつてのカトリック教会の友人の上にも、神の祝福が豊かに注がれるように祈っています。これらのことをすべて神の御子イエス・キリストのみ名を通して証いたします。アーメン。

## 末日聖徒イエスキリスト教会

◇ 浦 和 ワ ー ド 部 ◇

### 「~~付~~ 聖徒の道」~~原~~ 稿募集!

「聖徒の道」編集部では広く日本全国の兄弟姉妹からローカルページの原稿を募集いたします。福音に対する証、トピックス、何でも結構です。このページを日本全国の兄弟姉妹が互いに証を強め合う場としたいと思います。どしどし原稿をお寄せ下さい。要項は以下の通りです。

- 字数 400字詰原稿用紙（横書き）5枚以内
- 宛先 〒158 東京都世田谷区上用賀4-9-19  
東京ディストリビューション・センター  
「聖徒の道」編集部

できましたら写真を添えてお送り下さい。またスペースの関係で採用できないもの、また採用のものでも編集部で添削をさせていただく場合がありますので、あらかじめ御了承下さい。

